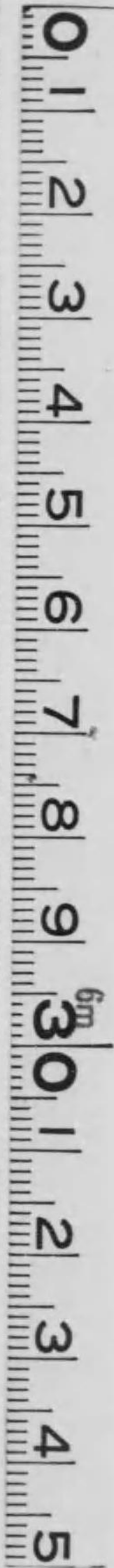


276

238

X
複写



始



21-3270

276-238



體育流劍術薙刀術

大日本學校衛生協會發兌

故大勳位公爵 桂 太 郎閣下題辭
 東京高等 嘉納治五郎先生題辭
 師範學校長 大隈重信閣下 序
 侯爵 加納久宜閣下 序
 元日本體育 會長子爵

元文部省學校衛 生主事醫學博士 三島通良先生序
 元陸軍戶山學校 體操科教官 志波敬高先生序
 東京高等師範 學校劍道教官 高野佐三郎先生跋
 學校劍道創始者 武術體操創始者 小澤卯之助先生著
 體育流武術元祖

大正 7. 9. 9
 內交

入真境

辛丑秋

大郎書



入真境



有無
一貫



嘉納治五郎



有無
一貫



體育流劍術序

社會人智の進歩に伴ふて、社會の道德人類の健康か
衰ふるは必至の數なり、進化論者の説く所に因れば、
人類の原始時代は、山野に徘徊する野獸の生活と甚
しき相違なきものゝ如し、即ち其自衛上、又生存の必
要上、自然の抵抗力を要する者ありしを以てなり、然
るに人文の開發、科學の進歩は、其必要を滅却して、吾
人の健康は、日々に衰へんとしつゝあり。
余は精神は物質を支配するとの信念を持し、且つ生

物は、其成熟期の五倍を生存するものなりと確信せり、然りと雖、健全なる思想は、健康體に宿る者にして、精神と物質とは、兩つなから相俟たざる可らず、文明の流風は、人をして怯弱ならしむ、是れを矯正し防衛するは、體育の法、與つて力ありとせざる可らず、體育流劍術の一書、或は此要求を充たすに庶幾らんか、尙武の精神は、神洲の元氣にして、是れか實行を鼓吹するは、今日に於て殊に其切要なるを感ずるなり。

明治四十四年夏

伯大隈重信

體育流武術序

生命は活くるに在るに非ず健康なるに在り、人生の幸福何物か健康に若くもの有らんや、現時我が國民の健康状態は、概して良好なりと云ふを得ず、而して體格亦優等なりと云ふを得ず、優勝劣敗生存競争の世界に立ちて、國民の健康體格實に此の如し、豈寒心せざるを得んや、嗚呼體育の普及は我國刻下の急務なりと云ふ可し。

小澤君夙に之れを憂ひ、我が國民の體格を偉大なら

しめ健康を増進せしめんと欲し、其の効果を收むるに熱中し、數十年間種々の方法を研究し、就中其の一として武術體操なるものを創案し、之れを公表して實驗すること茲に十有六年、予は君か轆軻流離の間に處して、不屈不撓三十有餘年猶一日の如くなりし意氣に感せずんは非ず。

抑も武術體操法即ち體育流武術か、體操として優良なること、武術として遜色無きことは、予の認識する所なり、之れを學校體操法とし、家庭體育法とし、將た社會體育法として、國民一般に實演するに至らば、其

の國家に益ある殆んど量る可からざる者あらん。本著稿成りて序を予に徵す、乃ち所感を叙へて卷首に記すと云爾。

辛亥夏

日本體育會長 子爵 加納久宜

武術體操法の序

本邦武藝の世に傳はるもの、その種類少なからねと、
さなから之を、學校に於ける體育の材料に充つへき
ものは、いと稀なり。蓋武藝と學校の體育とは、おの
ゝ其本領を異にする所あるか故か。若し武藝を
採りて、直ちに體育の完全なる材料とすへく、體育は
武藝によりて、充分の結果を得へきものと信するか
如きは、未だ共に體育を語るへからず。何となれば
武藝は、體育の爲に世にありしものにあらず、體育も

亦た、武藝にのみ倚りて、成立てるものにあらず。もとより。各、其起源と本領とを異にするにより、自然ら相一致せざる點存すれはなり。さらは此の兩者は、何所までも、親和する能はざるものなるかと云はん。其方法をたに求めなは、敢て望むへからさるにはあらず。其方法とは、武藝をして、學校體育の本領と、調和せしむるをいふ。但この事たる、須く先づ、學校に於ける體育の本領を識り、併せて、武藝に熟達せる人を俟ちて行ふべきのみ。予はかゝる意見を懐けること久しかりき。聞く、小澤君は長く教職に

ありし人にて、武藝を體育に應用せんことを研究し、初めて此書を著作せりと、其志の厚きは予の深く感佩するところなり。武術體操と云へることにつきては、なほ研究を要すへけれど、是書の體育に及ぼす所の裨益は、決して少なからざるを信す。序を乞はるゝに及ひ、平素の懷抱をしるす。

明治三十年夏の初め

三島通良誌す

體育流劍術序

一名劍術形體操序

劍術は精神氣力の修養に最も適切なりと雖とも、體格體力の養成に缺くる所あり、體操は體格體力の養成に最も適切なりと雖とも、精神氣力の修養に缺くる所あり。凡そ人の事を爲すや、體格體力如何に魁偉強壯なるも、精神氣力の堅確旺盛之に伴ふ無くんは、其成功疑ふべく、精神氣力如何に堅確旺盛なるも、體格體力の魁偉強壯之に伴ふ無くんは、其成功の一部を減殺すへし。此四者は實に唇齒輔車の關係を

有して、人間活動の原動力を成すものなり。小澤君夙に此に見る所あり、體操に劍術の精神を加味せば、則其效果の著大なるべきを信し、我國劍術の諸流を精査し、或は之を諸書に探り、或は之を名家に質し、研鑽多年、遂に一舉兩得の運動法を案出公表し、爾後十數年の經驗に徴し。之に改良を加へ更に名けて劍術形體操と謂ひ、載せて一本と爲し、序を予に求む。取て之を閱するに、體操にして良く劍術の精神を發揮し、劍術にして良く體操の原理に合致す、乃ち其效果の現はるゝ所、我國民をして、世界の競争場裏に於

て、常に優勝者たらしむるを得ん、然れとも、劍術は素と敵手に對して行ふものにして、寸微の放心を許さず、精神因て以て奮興し、氣力因て以て鍛鍊す、故に敵手を設けさらんか、其指導法適切ならざる時は、遂に死物模型となり、甚しきは劍術を以て一種の舞蹈と誤解するの弊を生ずるに至ることあり。於是乎、之か普及の任に當るものは、能く小澤君の心を以て心と爲すを要す、則ち其偉大の功を奏する期して待つべきなり、茲に卑見を述へ以て序に代ふ。

明治四十四年八月五日

陸軍戸山學校體操科教官
陸軍歩兵中佐 志波敬高

自序

予か、初めて武術體操の研究に従事せしは、明治十六年初夏、東京府師範に入學せし時にして、其の後十四年目即ち明治廿九年七月、武術體操論を著はし、東都の書肆小林仙鶴堂より發行せしめ、其の翌三十年八月、武術體操法を大日本圖書株式會社より發行せしめたり、嘉納高等師範校長の題辭、及ひ其の當時の文部省學校衛生主事たりし三島博士の序文は、該著の卷首に掲ぐるの光榮を荷へるものに係る、其の後、書

肆寶文館にて薙刀の初段を、又其の後書肆學海指針社にて、薙刀の書前後兩篇二冊と劍術の書一冊とを發行せり、故桂公の題辭は、其の書に掲ぐへく揮毫を乞ひしか間に合はず、遺憾なから今日まで空しく篋底に藏せしもの、其の「入眞境」の贊辭を賜はりしは、予の欣喜に堪へざる所なり、又大隈侯爵、元日本體育會長加納子爵、元戸山學校體操科(劍術を含む)教官志波中佐の各序文、並に高野高等師範劍道教授の跋文は、何れも前記劍術の書に掲ぐるの榮譽を得たる者にて、明治四十四年即ち辛亥の夏、ものせられたる者な

り其の爵、官、等の現在に合はざるあるは之れか爲なり。予か自序に於て、言はんとする所は、既に諸名士の序跋に明かなるを以て、復た贅せず。只本書所載の方法は、劍術薙刀術の形を體操に同化せしめたる者にて、試合に非ず、體育流武術の試合は、近き將來に於て、稿を改めて公表すべしと爾か云ふ。

大正七年八月下旬

武的體育法創始者
日本體育會體操學校講師
東京市麻布高等小學校校長

小澤卯之助誌

自序
 附言 本書の著述に際し、益友、華雪、渡邊新太郎君は、予が爲に挿繪
 揮毫の勞を取られしを以て、茲に尊名を掲げて、感謝の意を
 表す。

目次

緒言及び汎例……………一

第一編 體育流劍術一名劍術體操……………一三

第一章 日本刀の部分、木劍及び改良木劍……………一三

第二章 準備……………二三

第三章 手解 五本……………二八

第四章 基本演習 十本 外に呼吸運動一……………三三

第五章 初段、切返 十本 外に準備運動、呼吸運動各一……………四二

第六章 中段、居合拔 八本……………五三

第七章 上段、奥之手 六本……………五九

目次

目次

第八章	各學年配當……………	六三
第二編	體育流薙刀術 一名薙刀體操……………	六七
第一章	薙刀の部分種類、稽古薙刀及び寸尺……………	六七
第二章	準備……………	七四
第三章	手解 五本……………	八一
第四章	基本演習 十本……………	八七
第五章	初段 八本……………	一〇一
第六章	狭所演習……………	一一五
第七章	中段 六本……………	一二三
第八章	上段、奥之手 六本……………	一三六
第九章	各學年配當……………	一四四

體育流劔術薙刀術

一名劔術體操薙刀體操

小澤卯之助著

緒言及汎例

第一節 緒言

一、劔術體操及び薙刀體操の詳細は、神田區昌平河岸十四號學海指針社發行の拙著劔術形體操及び薙刀體操法前後兩篇に述べ置けるが、本書は更らに劔術に手解、初段、奥之手を増し、薙刀術に手解、初段を加へ、入

第一節 緒言

り易く入れれば速かに熟達せしめんことを期し、努めて簡易なる教授細目を編製し、之れに説明を加へたる者にて、目下日本體育會體操學校男子部女子部、東京市各市立小學校及び各府縣朝鮮臺灣滿州の各中小學、高等女學校等に於て實施しつゝ有る所の者を記述せり。

一、武術體操の起原

予は明治十六年四月東京府師範に入學の當時舶來體操を學びしが、其の興味なく運動量少なき等に慊らず、劍術薙刀術等日本固有の武術の形を應用して體操化し運動する事とせば、優秀なる體育法を構成し得らるべしとの愚考を起し、爾來敎職に従事の傍ら、日本固有武術及び舶來武術の研究に従事し、有志の兒童に課し、終に明治二十八年十月職に離れ専ら武術體操の完成に努め、同二十九年七月武術體操論を著し、同三十年八月武術體操法を著し、爾後改正に改正を加へ之れに關する

數部の著書を書肆に發行せしめたり。

尙體育的薙刀舞を、明治三十七年七月東京市日本橋區本石町三丁目寶文館より發行せしめたり、定價金三十五錢なり、此は武術遊戲の一種にして、歌詞に合はせ歌ひつゝ、薙刀術を應用し舞の手を加味し、趣味津津たる内に、軀軀を健にし優美の態度と沈着剛毅の精神を養ふ方法なり。

一、體育流武術の效用

體育流武術は、本邦固有武術の方法に順序を立て、之を體育學の原理に照合し、武術の本旨を失はしめずして體操に同化せしめたる者なり、武術の本旨を失はしめざるが故に、武術眼を以て之を觀れば一流の武術にして併も優秀なる武術なりと言ふの理由あり、體操に同化せしめたるが故に、體育眼を以て之を觀れば一種の普通體操にして、是れ亦優秀なる體操なりと言ふの理由あり、決して武術と體操とを折衷せる者に

非ず、又武術と體操と各其の本領を相侵せる者に非ず、嘗に其の本領を相侵すこと無きのみならず、各其の本領を發揮せる一舉兩得の方法なり、即ち武術と體操との兩目的を達すべき古今東西に未だ曾て有らざる所の方法なり。

何を以て優秀武術と云ふか、

(一) 諸武術何れも諸流派の形の特長を罔羅せる故、諸流派の武術を學びたるに稍等しき利益あり、素人目にも構の種類と斬突防拂の技の多きにより判断せらるべし。

(二) 體育に適合せる者故、身體の各部を均齊に發育せしむる利あり。

(三) 教授法を改良せる武術なるが故、容易に早く熟達するの利あり、即ち易より難に及ぼすべく組立て、又分解教授法をも研究し、且一齊教授を爲し得べく組織せる故なり。

(四) 左右上肢下肢を利かしむ可き進化せる武術なり。

右四利益の内其の一を有するも、之を古來の流派に比し優秀と云ふを得べし、況んや四を兼有するに於てや。

體育上より見たる效果

小學校令施行規則第十條を案ずるに、

「體操は身體の各部を均齊に發育せしめ、四肢の動作を機敏ならしめ、以て全身の健康を保護増進し、精神を快活にして剛毅ならしめ、兼て規律を守り協同を尙ぶの習慣を養ふを以て要旨とす」とあり。

此の武術が文部省令の此の要旨に適するや否やを述べし。

第一、身體の各部を均齊に發育せしむ。

身體の各部を均齊に發育せしむ可く組織せる運動法なるを以て、此の要旨を満すは勿論、其の發育の程度他の體操に比し多量なり、其の理由

は、氣合的運動にして精神の籠まると同時に力を籠めて運動す、即ち運動量多大なるが故に少時間にして充分なる運動を爲すを以て、比較的多く發育す。

第二、四肢の動作を機敏ならしむ。

武術は電光石火の機を失はず間髪を容れざる間に生死を決するの技なるを以て、機敏なる動作を養成するを得べし、而して如何なる體操も之に比すべくもあらず。

第三、精神を快活剛毅ならしむ。

此の武術は、痛苦なきのみならず、興味ありて愉快に行動し斬突防拂を行ふが故に、自然精神は快活となるべし、又敵に敗を取らざるの術を會得するが故に、精神も自ら剛毅となること他の體操の比に非ず。

第四、兼ねて規律を守り協同を尙ぶの習慣を養ふ。

此の要旨は、多人數にて行ふ規律的運動に共通なるを以て贅せず。

體操科の要旨を満たすこと他の體操に勝るあるも劣るなきこと前述の如し、是れ名を武術體操と云ふ所以なり。

尙此の他體育上より見て利益なる點は、

運動の性質傀儡的ならずして仕事のなるに在り、西人も體操は兒童が將來最も多く遭遇すべき動作に慣れしむるに在りと言へる語に適合す、又運動量多大にして機敏且つ勝負を決するの術なるが故に、身心を一層鍛練するの効あり。

德育上の感化の効

武道は我邦古武士に隨伴せる術なるが故に、實地之を行ふ者は身自ら武士となりたる心地すべくして、武士的精神を養ふや多言を要せざる所なり。

此の外實用上の利益を言へば、身を護り敵に勝ち近世の武技に早く熟達す、故に兵士となりて銃劍術等に早く熟達するは勿論、戦に臨み白兵戦を爲すも勝を制するの自信あるを以て、益々勇を鼓し奮進し、戦へば必ず敗を取らざるの利益あり。一般國民の體育法に適す、

體育を重むぜざる我が大和民族に、前述の實用上の利益を示して之を勵行せしむるの利あり、併も我邦古來武士の尊重し砥勵せる歴史を有する術なるが故に、之を行ふ者は得々然たるべく、之を觀る者は肅々として敬意を拂ふべし。

且夫れ體格偉大なる者が體格矮小なる者に對し、若し意見の相容れざる事ありて相争ふの場合に於て、腕力強き者は飽くまで之と争ひ、假令腕力に訴ふるも辭せざるの氣概を以てすべしと雖も、腕力弱き者は御

無理御道理として、之に屈從せざるを得ざるに至るは、往々見聞する所なり。

弱者の、山中など人無き所に於ける、又は單身外國旅行中などは、殊に此の傾き多かるべし、是れ嘗に個人と個人との間に行はるゝのみならず、國際關係に於ても亦然り、此の如く腕力の弱者は常に強者に輕蔑せらるゝ傾きありて、其の不利益少からず、若し夫れ我が矮小なる國民が、皆武術を心得、彼の偉大なる外人を術を以て投飛ばし打据ふるを得ば、彼れ外人をして、日本人は武術の心得あり、小粒なれとも山椒なりとの恐れを懐くに至らしめば、體格矮小にして輕蔑せらるゝに伴ふ不利益を免かれ得べし、故に武術體操の如く、體育の傍ら制勝の術を學ばしむるは、我が國民に取りて最も適當せる體育法なりと云ふを得べし。

予が武術體操を唱道實施以來、此處彼處に之れに類する方法を公表する者あり、何れも其の方法に至りては、只從來の武術の形を小變せる者若くは予の方法を所々眞似たる者のみにして、文部省令の體操科の要旨に合する者を見ず、又之れに合せしめんとせる研究苦心の跡を見ず、即ち該要旨中の身體各部を均齊に發育せしむるを得べき方法に非ず、而して之れに體操の文字を附するは、確かに體操なる文字の濫用なり、予は斯かる濫用者に切に望む一事あり、并は濫用者が小澤卯之助考案の武術體操法は此の點に於て缺くる所あるが故に、此の如く改めたりとの主張あらんことは是れなり、否らざれば方法の類出に由りて、徒らに世人をして撰擇に迷はしむるを奈何せん、又國民の體育上玉石併行の恐れあるを奈何せん、且又斯かる者流に敢て問はんとする一事あり、曰く或は予が校を來觀し、或は予が著書を參考とし、或は予が方法の所々

を窃取し版權を侵し乍ら予が著書あるを知らざる爲ねし、自ら發明せるが如く装ひ、公表するは卑怯に非らずや。

第二節 汎例

- 一、掛聲は矢、曳、當を用ゐ、何れも矢と呼びつゝ構へ、一節二舉動ならば、曳と呼びつゝ撃ち矢と呼びつゝ構に復し、規定回數の終りに當と呼びつゝ構に復す、次に構換法により矢と呼びつゝ構を變ず、又一節三舉動ならば矢、曳、當と呼び、一節四舉動以上ならば始めの舉動を矢、終りの舉動を當、始終の間は幾舉動ありとも皆曳を唱ふべし。
- 一、構換法は第四圖の點線圖より直ちに右(左)構に變ずるなり。
- 一、連續法は第四圖の點線圖より次ぎの演習の構を取るなり。
- 一、各節の名稱の下に運動部を説明せるは、主なる運動部位のみなり

と心得べし。

- 一、構ふるに當り、刀尖又は薙刀尖を前に向くる時は足を踏込み構へ、刀尖を後に向くる時は足を退け構ふることす。
- 一、左右構動作は必ず左構動作より始む。
- 一、各演習の説明は居合拔の外左構動作のみに止む。
- 一、圖の説明中の○は構即ち用意の姿勢にして、一は第一舉動の姿勢、二は第二舉動、三は第三舉動の姿勢を示す、又太刀筋及び脚の進退符號个の頭に施せる一二三等の數字亦之に同じ。
- 一、教授者は生徒が熟練せる後は、連續法に従り、又便宜構を變じ、又は斬突防拂部を變じ、或は歩法を變じ行はしむべし。

第一編 體育流劍術 一名劍術體操

第一章 日本刀の部分、木劍及び改良木劍

第一節 日本刀の部分

但し戰國以後の大小二口の部分と知るべし

日本刀の部分を大別すれば、柄、鞘、鏝、中身、中心の五部とす、而して刀を腰に差し、身に附着せる部分を差裏と云ひ、反對(左方)の部分を差表と云ふ。

(甲)柄欄) 或は刀把とも云ふ、長さ普通二握半にて、七寸乃至八寸位なり。

(二)柄頭) 柄の端の名稱にして、或は單に頭とも云ふ、此の部分には皆金屬を附着せり。

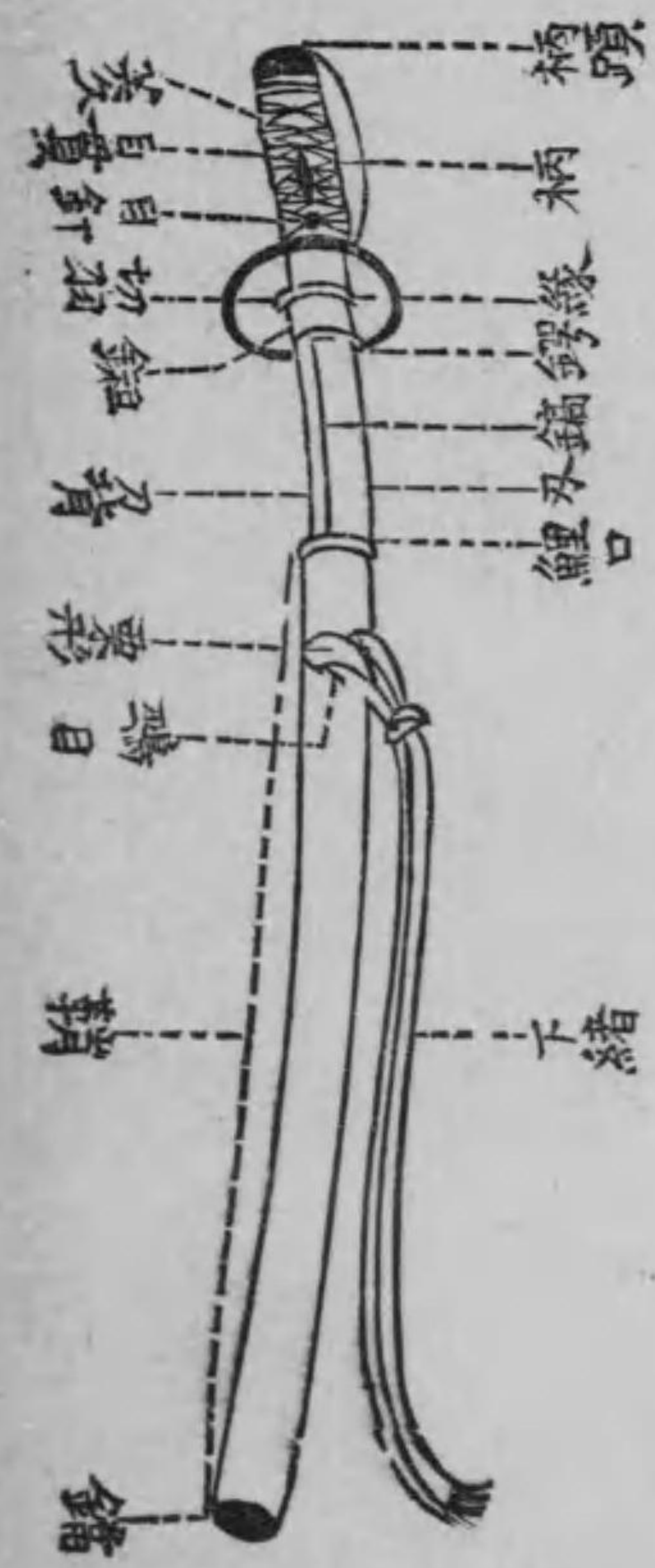
(二)縁柄口) 柄の鏝元の一端を云ふ、此部分には金屬の輪を附着せり。

第一編 第一章 日本刀の部分、木劍及び改良木劍

(三)中柄なかへ 柄の中央部即ち柄頭と縁とを握りたる兩手の間の部分を云ふ。

(四)目釘めな 中柄と縁との間にありて、中心をして柄より脱離せざらしめんが爲めに、柄の一面より中心を貫き、柄の他面に見はるゝ螺旋釘或は竹釘等を云ふ。

(五)目貫めな 中柄の左右兩側に在る二箇の金具の稱にして、一は中柄表の縁に近き方に



第一圖

在り、他の一は中柄裏の頭に近き方に在るが故に、何れも握りたる時、指際に當れり。即ち縁に近き目貫は小指際頭に近き目貫は拇指際に在り。其の効用は、敵と相戦ふとき握りたる手掌をして上下に滑べらざらしめんが爲なりと云ふ者あれども、是れ附會の説なり。古は今の目釘穴を目貫と云へり。是れ目釘を打つ爲めに貫きたる穴なればなり。而して打ち貫きたる目釘を抑ゆる爲めに、目貫穴に鮎形の蓋を爲せるを、後世に至りて形も變じ、着け所も亦更はり、目貫は名ありて實無き飾物となれり。

(六)菱ひし 柄は大抵絞革にて包み、其の表面に黒の絹眞田若くは木綿眞田を綾に巻けり。其の綾取りを菱又は筋と云ふ。菱の數は大約十四十五二十二十一の四種なり。

(乙)鞘

(一)鯉口 刀身を納むる口を云ふ。

(二)栗形 (栗の實の形を爲せる故に名づけたるならん)

鯉口より凡そ二寸乃至二寸五分位隔たりたる鞘表に取付けありて、下緒を貫く爲めに穴を穿てり。此の穴及び此の穴に挿入せる不正環形の金物をしんご鳩目と名づく、是れ小鳥しんご鳩の目に似たるを以て名づけたるものなりと云ふ。

(三)下緒 長さは刀に在りては其の刀の長さに等しくして、栗形より三四寸下にて結び、兩端は其の儘下げ置く、脇差は栗形より六七寸下にて結び端を切るなり。

(四)鑰こぎ 鞘の尖端を蓋へる金物を云ふ。古は長太刀を腰に差さずして佩か懸け吊るすさきたる故、鞘の尖端に金物を附けて目方を増し、鞘と柄との重量の權衡を失はざらしめたるものなり。然るに後世に

至り、刀劍を腰に差す様になりては、其の權衡を得せしむるの必要なきに至りたれども、尙古製に従へるなりと、本邦刀劍考に見えたり。

(丙)鑿 附り切羽きりば鑿はき

(一)鑿 縁と鯉口との間に挟まり圖形・橢圓形・木瓜形等、種々の形を具へたる金屬製の平板にして、又之れに透しとて、種々の形を爲せる數多の穴を穿てる者あり。鑿は柄と鞘及び、中身と中心とを界し、敵の刺撃を受け止むるの効を有せり。

(二)切羽 切羽に大切羽、小切羽の別あり。橢圓形の薄き金屬製の物にして、大切羽は二個ありて鑿の兩面に附着し、小切羽は大切羽の外面に重なり、小切羽の一は鯉口に他の一は縁に接せり。著者は鑿の下即ち縁に接する物を下切羽と名づけ、鑿の上に在る物を上

切羽と名づけたり。其の効用は鑿を動搖せざらしめんが爲なり。

(三) 紐 上切羽に接して、中身の鑿元を長さ約七分程纏へる金物を云ふ。其の効用は、藏めある刀身をして鞘の室に觸れざらしめ、且紐の表裏兩側にある毛彫に依りて、鯉口の内面と緩く摩擦して、柄を下ぐるも容易に中身をして抜けざらしめ、又切羽及び鑿を抑へ、鑿を動搖せざらしむる効用あり。

附言 鑿、切羽、紐の表裏の名稱は著者の命名せる者なり。

(丁) 中身 中身とは鞘に納まれる部分を云ふ、左に之れを細別す。

(一) 刀刃 刃の部分を云ふ。

(二) 刀背(棟)とも云ふ 刀刃と反對の部分を云ふ。刀背の頂に角なきを丸打若くは丸棟と云ひ、圓からず角なくして平坦なるを三棟、眞の棟、或は相州棟と云ふ。相州出來の刀に此の種の物多かりしが

故なり。刀背の其中途より薄くなれるものあり。之れを冠該と云ふ。左文字の名刀即ち左の安吉の打ちたる刀は、多く此の種のものなりしと云ふ。

(三) 刀側 刃の左側面を左刀側(身表)と云ひ、右側面を右刀側(身裏)と云ふ。兩刀側に各鑄及び樋ある物あり、鑄とは兩刀側の内の少しく高くなれる角を云ふ、鑄を削るとは激戦の形容にして、激戦には此の角即ち鑄の削らるゝ如く思はるゝが故に云へるものなれども、決して鑄は削らるるものに非ず、如何に激しく戦ふも、只鑄に凹疵の出来るのみなり、鑄より棟迄を鑄内と云ひ、鑄より刃迄を鑄外と云ふ。鑄無きものを平打又は平造と云ふ。之れは合口(短刀)に多し、兩鑄内に溝あるものあり、之れを樋と云ふ、生血を流れ落ちしむる爲めのものなり、故に一名血流とも云ふ、血流は一、二、三筋なるあ

り、其の各筋は長短太細等の別ありて、鐔元より中途迄なるあり、又中途より切先迄なるあり、或は南無阿彌陀佛又は八幡大菩薩等の文字或は龍、松、竹、梅等の畫を彫り着けたるもの等あり。

(四)刀尖 刀の尖端凡そ一寸位鋼鐵のみの部分を云ふ。即ち刀刃の一層刀背に向ひて弓形に曲れる部分にして、切先又は銛子とも云ふ。

(五)鐔元 鐔に近き部分を云ふ。

(戊)中心 中心は又小身とも云ふ。柄に

嵌入せる部分にして、製作者の氏名及び製作の年月を銘記しある刀(在銘の刀)は、此の小身に銘記し在るものなり。

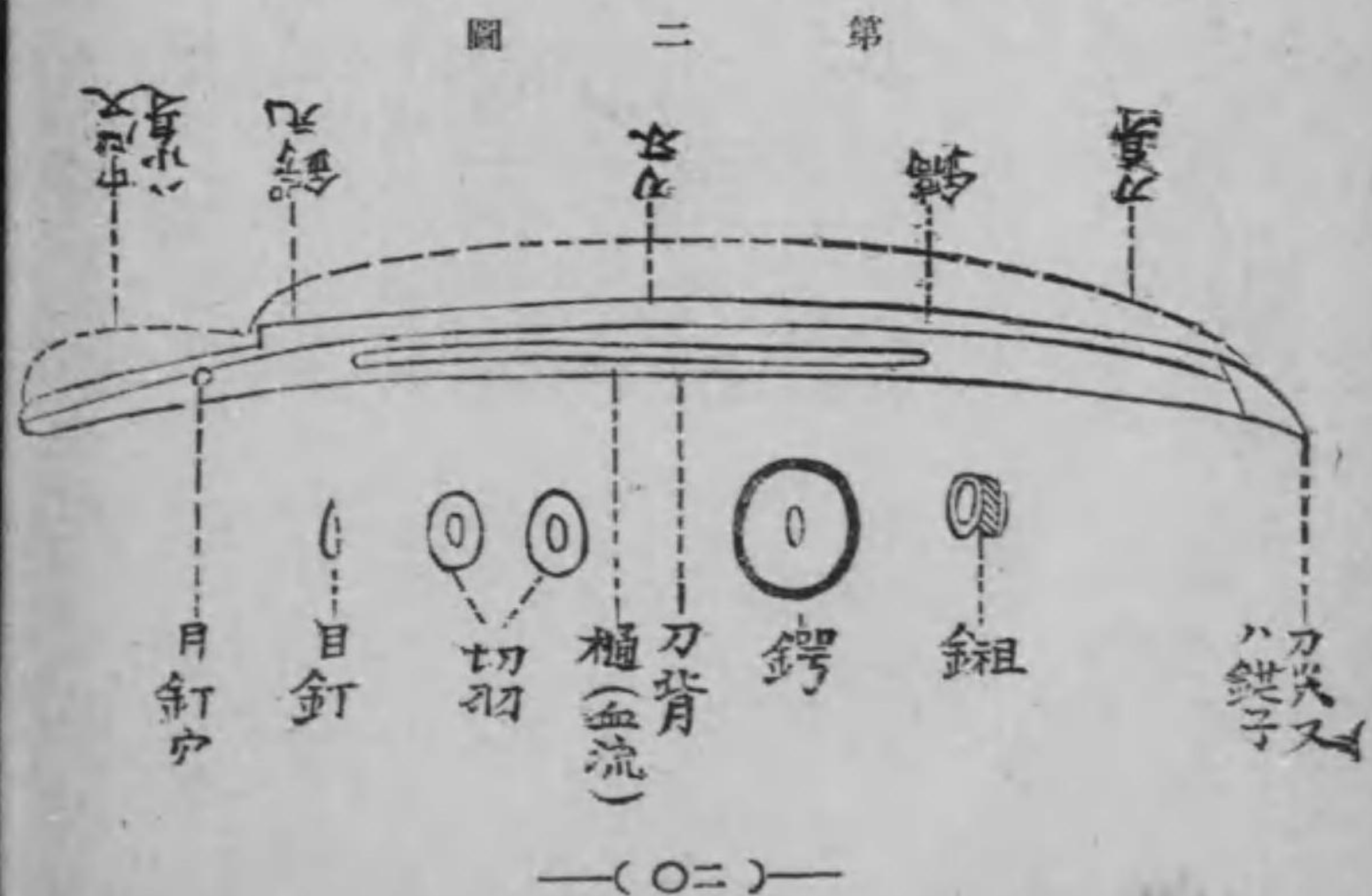
(一)中心の表裏 柄表に接する部分を中心表と云ひ、柄裏に接する部分を中心裏と云ふ。銘は通常中心表に彫刻すべきものなれども、太刀銘たちめとして中心裏に彫刻せるものあり、是れ佩く時は、刃を下にして佩ぶるが故に、裏が表に變ずるを以て、其の銘を中心裏に刻めるなり。中心裏に刻める銘は、佩くと佩かざるとに關せず、凡べて太刀銘と云ふ。

(二)目釘穴 目釘を貫く穴なり。

(三)中心の棟と腹 中心の刀背に續きたる部分を中心棟と云ひ、刀刃に續きたる部分を中心腹と云ふ。

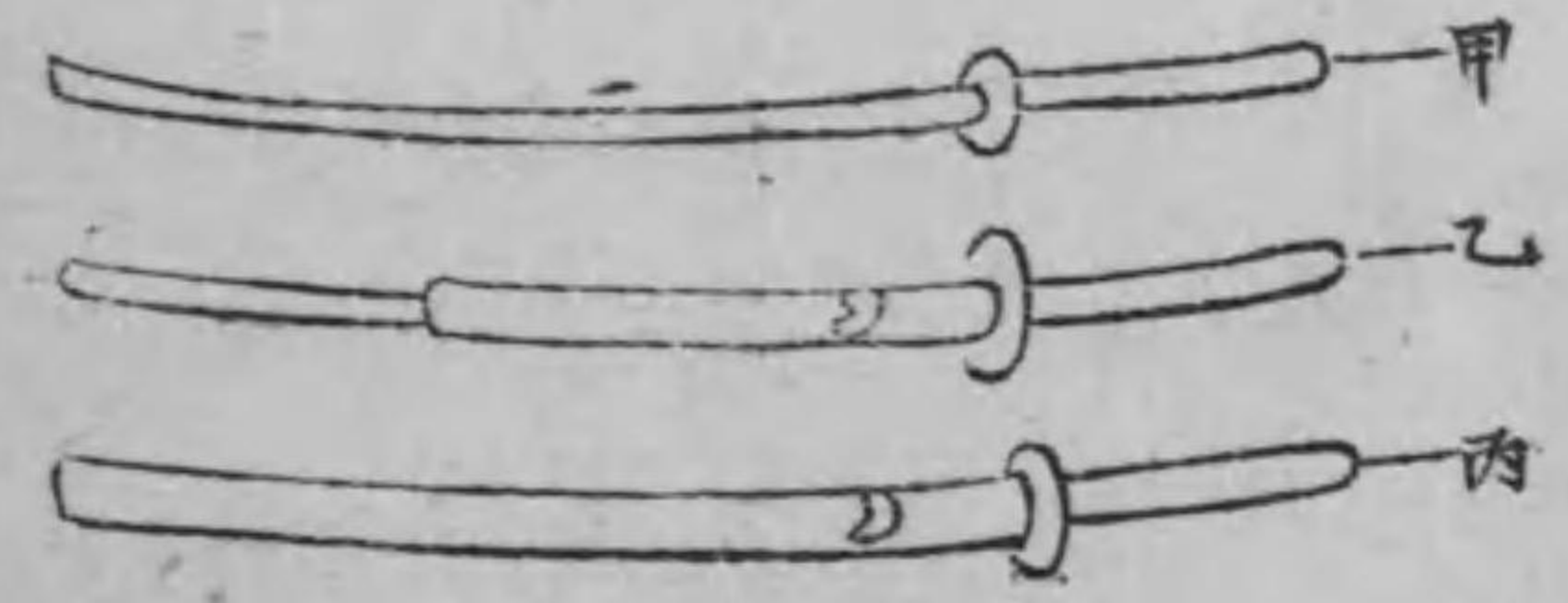
第二節 木劍及び改良木劍

第一編 第一章 日本刀の部分、木劍及び改良木劍



(甲)木劍或は木太刀とも云ふ。木劍は櫨の木にて太刀形に造りたるものにして、流儀により長短の差及び鍔無きものあり。皆何れも法式(形)を使ふに用ふるものなれども、竹刀の發明なき古は試合にも用ゐしものなり。而して其の長さは、尋常小學第六學年以上大人に至る迄は、總長二尺八寸其の内柄の長さを七寸五分とす、尋常科第三、四、五學年生に用ゐしむる者は、總長さ二尺四寸二間の材にて五本を取る、柄七寸位を可とす、但し身の長さは一、二寸増減するも差支なし。

(乙)(丙)改良木劍 改良木劍は著者が工夫せるものにして、革鍔或は鐵鍔を着け、亞鉛製の鞘に納めたるものなり。(乙)は一尺二寸許りの短き鞘を用ゐたるものにて、取扱上輕



—(二)—

便にして且つ廉價に製作し得べし。(丙)は鞘の全き者なり。洋服を着けたる者には、別に革帶又は兵兒帶の如きものを用意せしめ帶ばしむるを可とす。

第二章 準備

一、對面及び解散の禮
「集れ」の令にて整列せる時及び解散せんとする時は、帶劍せる時と拔劍(氣を付け)せる時とを問はず、教師生徒互ひに禮(上體を四十五度前に傾く)を爲すべし。

一、氣を付けの姿勢(拔劍せる時)
其の方法は、第三圖の如く、右手にて柄頭に近き部分を筆の雙鉤の持方の如く持ちつゝ、右



第三圖

手を下げ刀尖を上げ、左手の拇指と食指にて刀背より兩刀側を撮み
(點線圖)矢と呼びつゝ左手を下ぐ、但し左手は體に接觸して下げ小指
を股に觸れしむ。

一、休めの姿勢(拔劍せる時)

左足を左前隅に出しつゝ、刀尖を下ぐ(刀尖を地に着くべからず)。

但し帶劍せる時の氣を附及び休めの姿勢は、普通體操の方法に同じ。

一、分列及排列

教師は「分列線集れ」の令を下す。

生徒は各定められたる分列線に着く。

次に「開け」進めの令を下す。

生徒は下圖の如く開く。

但し刀刃を前にす。

圖 五 第



「直れ」の令にて氣を附の姿勢に復す。

又「分列線集まれ」の方法を省き直ちに

「排列位置に着け」進めの令を下すを最も可とす。

此の場合及び前項「開け」進めの場合に於て、欠席生ある時、他生を以

て缺位を補ふと否とは便宜に従ふべし。

一、拔劍

(イ)胸の拔撃(第六圖)

帶劍し氣を附の姿勢に在りて「拔け」(豫

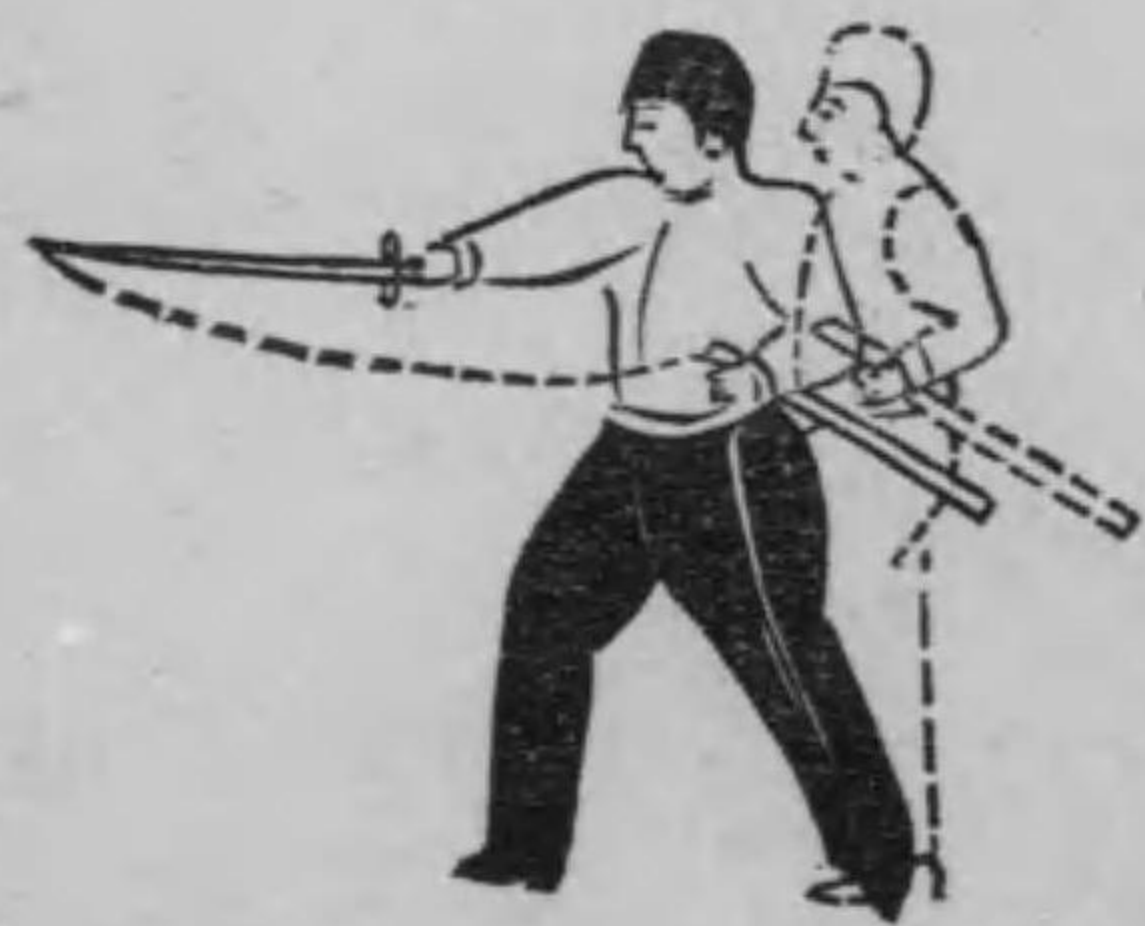
令)劍(動令)の號令下りたる時は、曳と呼び

つゝ胸の拔撃を爲す。

其の方法は、左手にて鯉口を掴み反を打

つと同時に、拇指にて鐔を押し上げ鯉口

圖 六 第



を寛げ、右手にて縁を握り右足を踏込むと同時に、右片手にて横に拂ふ如く抜き放つて敵の胸を撃つ、刀は前後に一直線ならしむ。次ぎに矢と呼びつゝ氣を附の姿勢を取る、次項の眞向拔撃亦之に倣ふ。

(ロ)眞向拔撃(第七圖)

眞向撃抜け(豫令)劍動令

其の方法は、前項胸の拔撃の要領なれども、右手にて抜放ち右手を上ぐると同時に、左手にて柄頭を握り兩手にて撃下ぐるの差あるのみ。



一、納劍

納め(豫令)劍動令

其の方法は、左手にて鯉口を掴み、右手にて刀背の中央部を鯉口に載せ、左の拇指と食指とにて兩刀側を軽く撮み、右手を右上前方に伸ばし、直ちに右手を鯉口に運び刀を納むると同時に、當と呼びつゝ兩手を下ぐ。

一、始業終業の藝禮

排列を終り抜劍せる時は、演習を始むべき順序なるを以て、教師生徒互ひに徐ろに藝禮を爲すべく、授業を終らんとする時は教師「終り」と令し互ひに徐ろに藝禮を行ふべし、終始共に決して禮など命令すべからず。

其の方法は、蹲踞して刀を前(刀尖先、刃左向)に置き、兩手を膝上に置き、て敵に注目し、徐ろに兩指先を地に着け頭を上げ、兩手を膝上に復して敵に注目す。

次ぎに刀を持ちて立ち、氣を附の姿勢に復す。

第三章

手解五本各自演習三本切返二本

一、手解は極めて簡易なる技にて、先づ初心者に課せんが爲めに撰みたる者なり。其の内切返し二本は、初心者をして興味を感ぜしめつゝ、撃受の手心を實際に近く確實に會得せしむる效あり、詳細は第五章に述ぶ。

一、左右三回づゝ行ひ、左構動作より始め、三回目目に構換法により右構に變じ、右構にて復た三回行ひ、連續法により次ぎの動作に移るなり。

●一本目 踏込上段面 胸、上肢の運動
矢、矢と唱へつゝ踏込上段に構ふ(第八圖)

曳、曳と唱へつゝ左足を踏み込み面を撃つ(同圖一)

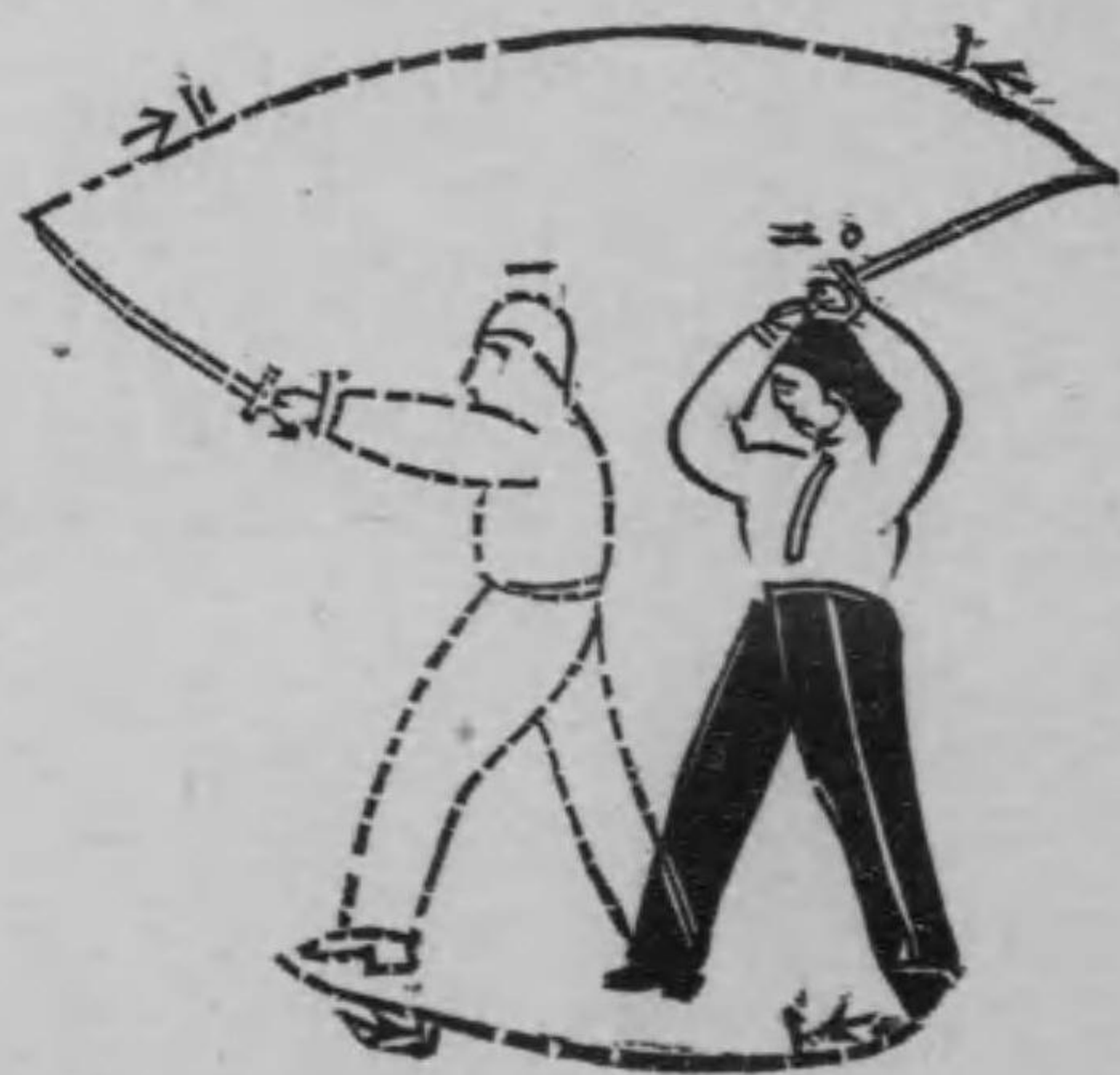
面撃は、刀にて風を斬り迂鳴を生ぜしむべく鼻條を目掛けて急速に短時間に勢ひ鋭く氣合を籠めて行ふべし、凡べて撃は此の心掛けあるを要す。

曳、左足を退けつゝ踏込上段に復す。

●二本目 中段面 上肢の運動
矢、中段に構ふ。

曳、送足にて進み面撃第九圖一

但し手解に限り、送足は心ずしも一步なるを要せず、半歩位にて行



はしむるも可なり。

矢、送足にて退き中段に復す。

但し面撃の氣勢にて中段に復すべし、以下倣之。

●三本目 中段面受 胸、上肢の運動

矢、中段。

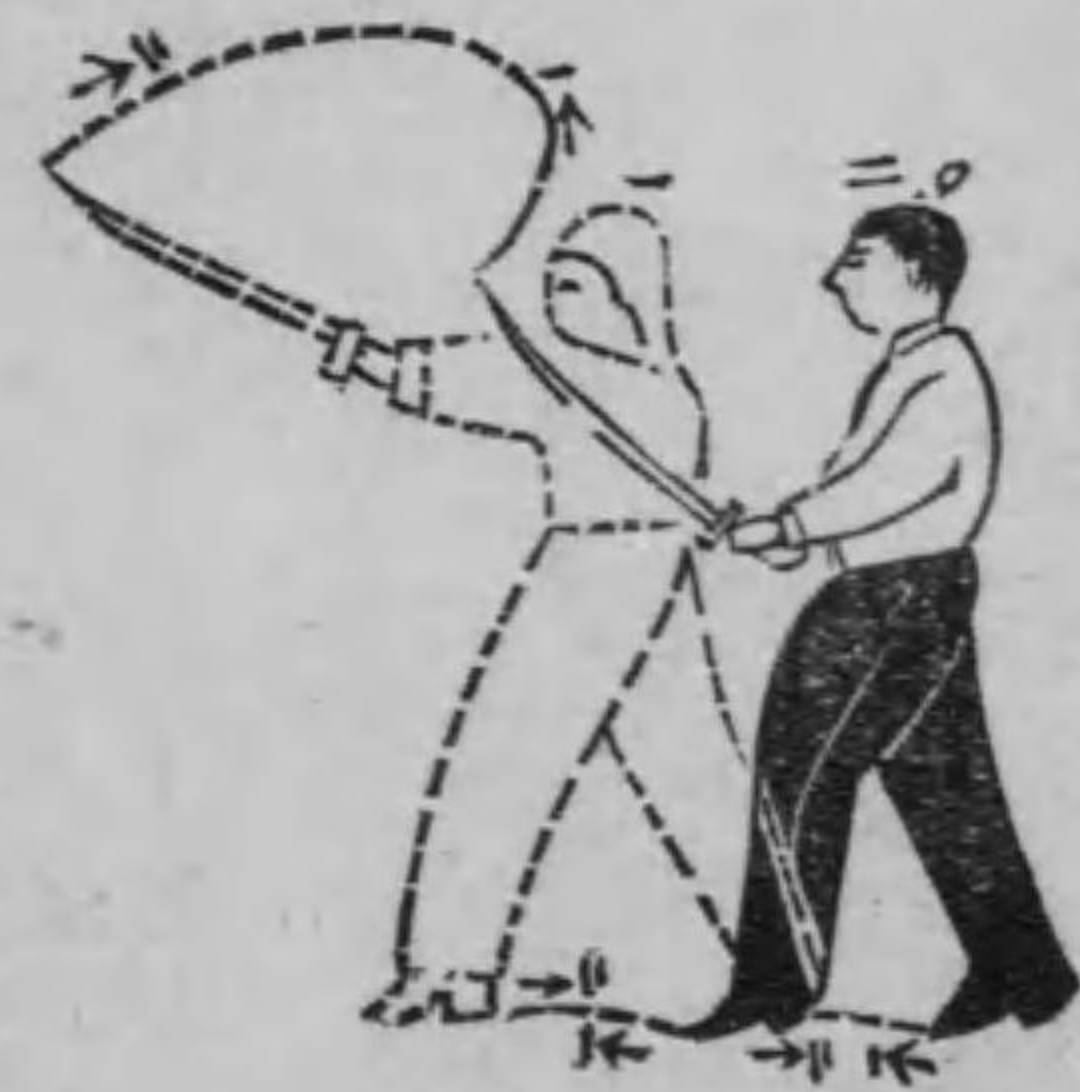
曳、送足にて進み面受(第十圖一)。

矢、送足にて退きつゝ、中段に復す。

●太刀筋の注意

面受の方法は柄を横面上に上げ、刀尖を前隅に向け水平より少し低くし、中段に復する時は刀を振冠り面撃の氣

第九圖



第十圖



勢を示す。

●四本目 切返、面の順受 上肢、頸、胸、腰の運動

面の順受とは、兩臂を交入せざる形にて面を受くるを云ふ、前節面受の方法是れなり、若し兩臂を交叉して受くる時は、之を逆受と名づく。

打太刀、受太刀共に矢と呼びつゝ、左構中段に構ふ。

第一回は互ひに曳と呼びつゝ、打太刀面撃ち、受太刀面受け、次ぎに互ひに矢と呼びつゝ、前と反對に受太刀撃ち、打太刀受け。

面受は、敵の勢ひ鋭く撃下す太刀を跳上ぐべく力を籠めて受止むるなり。

第二回三回何れも第一回に同じ。

但し三回目の終りには互に當と呼ぶ。

左に之れが圖表を掲ぐ、即ち左右各六舉動づゝなり。

受太刀	打太刀	構	
		1	2
矢構	矢構	1	1
曳受	曳撃	2	2
矢撃	矢受	3	3
曳受	曳撃	4	4
矢撃	矢受	5	5
曳受	曳撃	6	6
當撃	當受		

第二回以下第一回と同じきものは以下(第五章までも)其の説明を略す。

●五本目 横面 上肢の運動

双方共に矢と呼びつゝ左構中段に構ふ。

第一回 互に曳と呼びつゝ。

打太刀は敵の左横面の交叉撃、受太刀は左横面受。

次に互に矢と呼びつゝ、受太刀は横面撃、打太刀は横面受。

横面受の方法は刀を左前隅(刃は左前隅向)に立つ。

其の氣合は、勢ひ鋭く我が横面を撃ち来る敵の太刀を跳飛ばすべく

受くるなり。

第四章 基本演習

十本、外に呼吸運動一あり。

本章は左構動作のみを説明す、故に單に中段とあるは左構中段と心得べし、他の構皆之に倣ふ。

基本演習の回数は、左構にて三回行ひ、構換法により右構に變じ亦三回行ふを本體とす、本章にては一本目のみ此の説明を爲し、他は之を略す。基本演習の各節は連續施行せしむるを常とす。

●一本目 片手拂かたてはらひ 頸、胸の運動

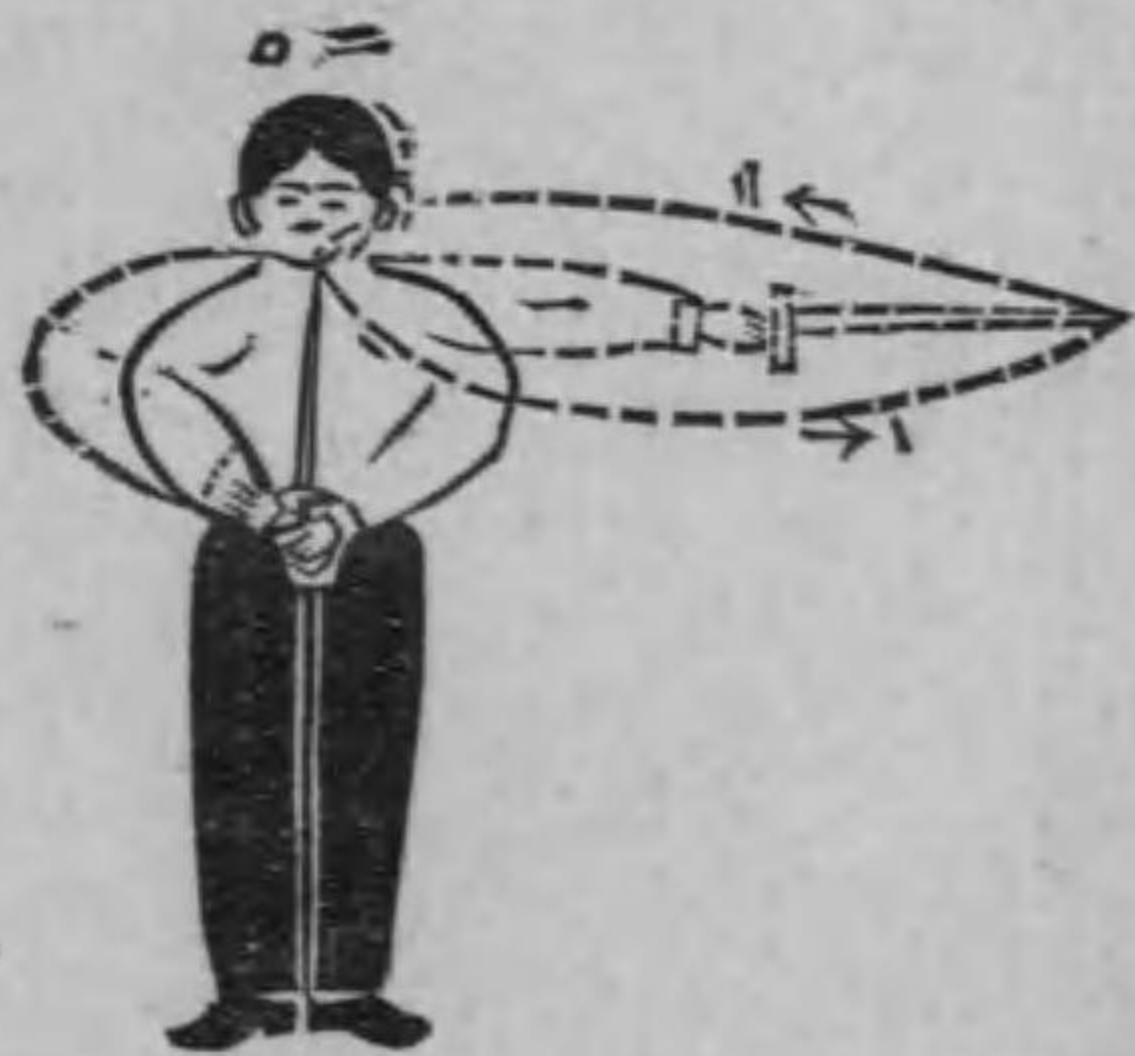
矢と唱へつゝ、中段(第十一圖○)に構ふ。

中段は流義により精眼、星眼、青眼、清眼、晴眼、正眼、誓眼とも書く。

曳と唱へつゝ(點線圖一)の如く左を向くと同時に、右手を腕骨に當て、左

手にて左方の敵の胸を拂ふ(刀を平らにし刃は後方を向く)但し刀にて風を斬り迂鳴を生ぜしむべく氣合を籠むべし。矢と唱へつゝ正面すると同時に中段(同圖二)に復す。

圖一十第



但し三回目即ち最終の此の動作は、當と唱へ續いて連續法により矢と唱へつゝ右構中段に取る。右構にて三回行ひ、連續法により次ぎの構を取る。

●二本目 脇構肩 上肢の運動

矢、脇構

曳、後足を進むると同時に袈裟斬。第(十二圖一)

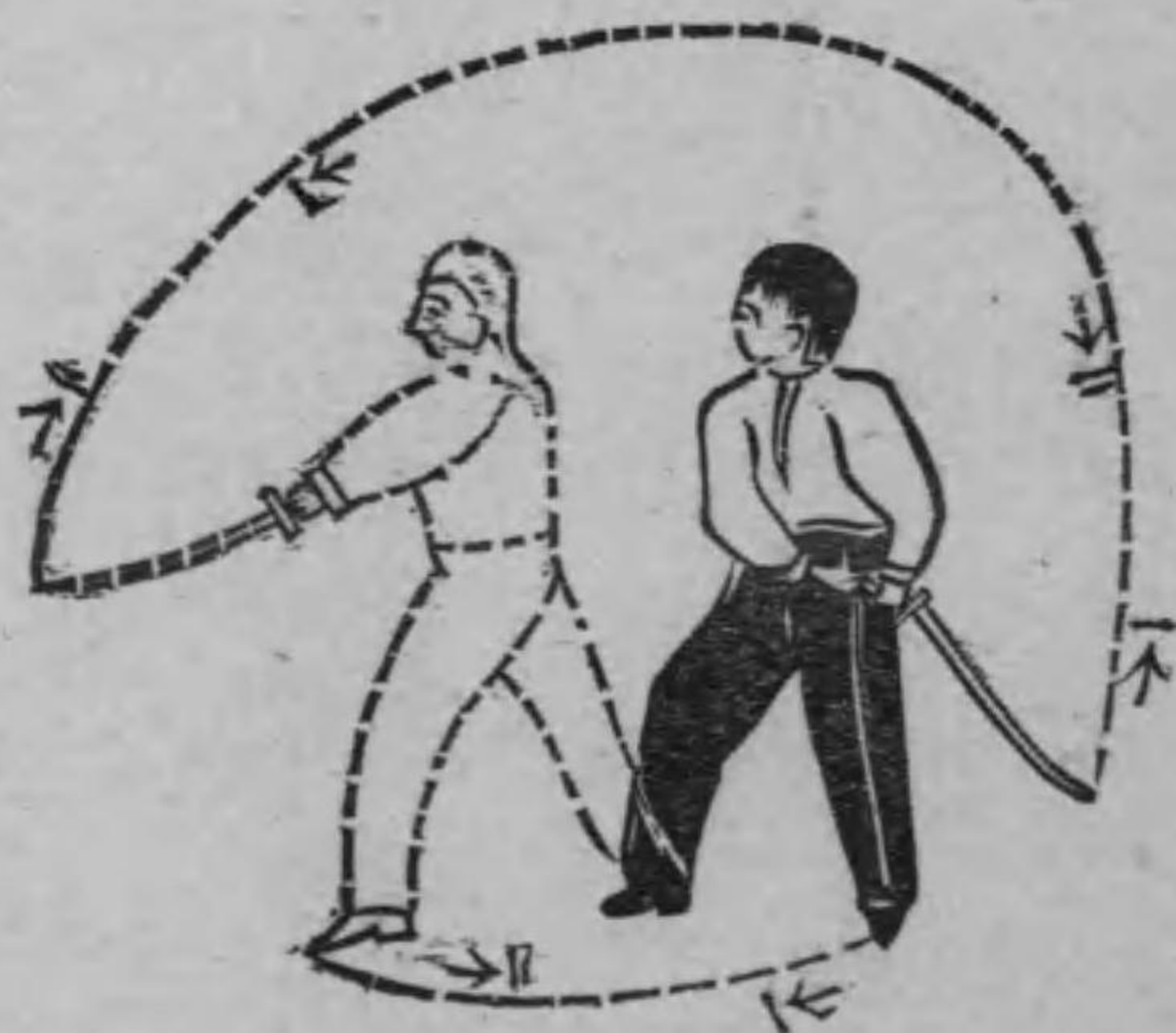
矢、左脇構に復す。

●三本目 留擊 平均運動

矢、揃足上段。

曳、左脚を上ぐると同時に、撃下ろして左手頸蹠の邊を膝の上内側に留む、刀尖は水平より少しく下ぐ。(第十三圖一)

圖二十第



圖三十第

矢、揃足上段に復す。

●四本目 諸手突 肩の運動

矢、精眼に構ふ。

曳、敵刀を右方に拂ふと同時に送足にて喉を突く(刃は下向のまゝ)。

但し初年級にては敵刀を拂はず直ちに突くべし(第十四圖一)。

矢、送足にて退くと同時に構に復す。

●五本目 脚受 背、腹、頸の運動

矢、踏込上段。

曳、右足を退くると同時に、體を屈め面を下げず敵の全身を注視すつゝ刀尖を下げ刃を右に向け右脚を拒ぐ。(第十五圖一ノ二)

曳、胴體其の姿勢の儘にて左脚を退く(駈退く)ると同時に、刃を反へし(刃を左に向け)左脚を拒ぐ。(第十五圖一ノ二)

第四十圖



是れ兩手交叉拒の形なり、若し此の形にて撃つ時は交叉撃と云ふ。前述の兩舉動を合せて「ええ」と唱へつゝ一舉動に行ふ。

矢、後足(左足)より二歩駈進み踏込上段に復す。

此の駈退き駈進みは、共に踵を地に着けず爪先にて進退すべし。

●六本目 仰撃 腹、背、反る、頸

(仰向)脚(舉踵)上肢(上伸)の運動

矢、反柳。

曳、左足を進め兩足を揃へ爪立つと同時に、頭上(崖上、樹上等)の敵を撃つ。(第十六圖一)但し後足は前足の少し前に踏込むも可なり。

第五十圖



矢、反柳に復す。

●七本目 胴受

横腹、腰の第

運動

矢、下段に構ふ。

曳、左足を退け兩足を揃ふると

同時に、刀尖を左前隅に下げて

左腕を拒ぐ腰を左に折り右手を

額上に當つ(第十七圖一)

矢、左足を踏込むと同時に、面撃の

氣勢を示して下段に復す。

●八本目

跳斬

跳躍運動

矢、中段

圖六十第



圖七十第



圖八十第



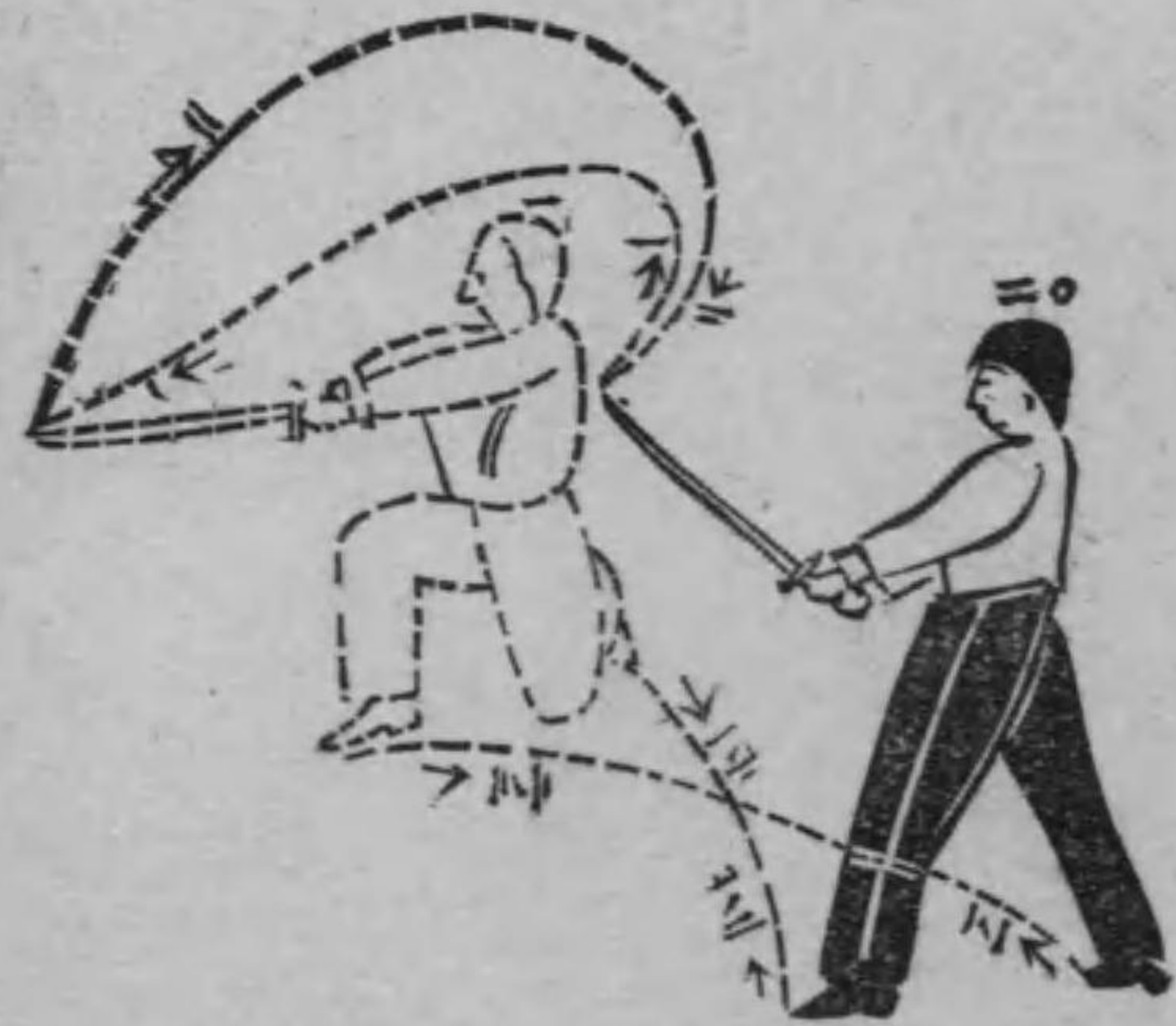
袈裟斬りす。(第十八圖一)但し熟練するに従ひ飛達進みを爲す、随つて構に復する時は飛達退きを爲す。
矢、跳達へつゝ刀尖を上げ左中段に復す。

●九本目

隅飛折敷胴

第一編 第四章 基本演習

圖九十第



曳、跳達ふると同時に、刀尖を左、上、右、下、左、後方に廻はしつゝ、右手を右腕骨に當て、左片手にて敵の左肩より

矢、中 段。

曳、先づ後足なる右足より右前隅に跳込むや否や、左足を右足の左後隅に移し、左膝を折敷くと同時に、交叉撃の方法にて敵の左腕を斬る。

(第十九圖一)

矢、立ちつゝ左足より舊位置に復すると同時に中段に復す。

● 十本目 ぶくろあしどう 送足胸 下肢の運動

矢、星眼。

曳、送足にて進むと同時に、半ば膝を屈し敵の左腕を交叉撃す。

交叉撃にて刀尖を廻はす時は、刀尖が横以上後方に向かざるを度とし、又斜めに撃込まず平に撃込むべし。

第 二 十 圖



矢、送足にて運くと同時に、面撃の氣勢を示し星眼に復す。

● 山字形 呼吸運動

用意 氣を附けの姿勢に在りて、左手を右肩に持ち來り、拇指と食指にて刀背を撮み、刀を左方に仆しつゝ、左手を撮換へ兩手を下垂す(刀背は下を向く)。

一、兩手を前方より頭上に擧げ、少しく下げて兩上臂及び刀を水平にす。

二、兩手を上げ前方より下げ用意の姿勢に復す。

此の如く數回行ひ止めの令にて氣を附の姿勢に復す。但し此の運動は必ずしも行ふを要せず。

第五章 切返きかへし

十本

外に準備運動、呼吸運動各一あり。

夫れ切返なる者は、修業者をして撃受の手心を實際に近く確實に會得せしむる益ある者なれとも、從來面の切返及び其の變化たる烏飛の二方法あるに過ぎざりき、著者是に於て、劍道の諸種の技を應用して身體各部均齊の發育を爲すべく、切返十本を組立てたり、此の外始めに準備運動、終りに呼吸運動を加へたり。

先きに撃ち又進む者を打太刀と云ひ、他の一方を受太刀と名づく。

準備運動と呼吸運動とは各左右一回づゝ之を行ひ、切返は打太刀も受太刀も左構にて打と受とを三回づゝ行ひ、構換法により右構にて亦互ひに打受三回づゝ行ふ、但し面の順逆受と烏飛とは左右二回づゝとす。

●骨遺劍 準備運動

是は其の名も方法も天道流より取りたる者にて、沈着の態度及び沈着の精神を養ひ、八相、中段、上段、受太刀、精眼の確實なる構方、突方、打太刀及び氣合を籠め發聲する練習をなす。

打太刀、受太刀共に左八相に構へ、徐ろに爪立ちて直立に復し、少しく膝を屈し、其の儘徐ろに打太刀は三步進み、受太刀は三步退き、共に三步目に中段に構へ合はす。

次ぎに矢曳と呼びつゝ、送足にて進、受太刀は左足を退くると同時に上段に取る、み喉を突く。但し矢の懸聲は低く短かくす。

打太刀は徐ろに二步退き、三步目に大股にて退きつつ左八相に復す。受太刀は徐ろに四步進み、四歩目に左八相に復す。

双方進むも退くも構に復するも、皆同時たるべし。

打太刀、受太刀共に連續法により右八相(右構)に變じ、方法回数共に前述の通り行ひて氣を附の姿勢となる、以下倣之。

●一本目 摺上面 上肢、胸の運動

互ひに矢と呼びつゝ、打太刀左送足上段、受太刀左中段に構ふ。

第一回、互に曳と呼びつゝ、打太刀面撃、受太刀摺上げ(左構の右陰に取る)、次ぎに互に矢と呼びつゝ、受太刀面撃、打太刀摺上ぐ。

●二本目 打落 上肢の運動

互に矢と呼びつゝ、左中段に構ふ。

第一回、互に曳と呼びつゝ、打太刀は敵の左胸交叉撃、受太刀は之を打落す、次ぎに受太刀は敵の左胸交叉、打太刀は之を打落す。

●三本目 脚拂 平均運動

互に矢と呼びつゝ、打太刀は送足上段、受太刀は中段に構ふ。

第一回、互に曳と呼びつゝ、打太刀は體を屈め敵の足を交叉方法にて拂

ひ、我が刀尖を左前隅に向け止む、受

太刀は刀を上段に取ると同時に前

(左足を舉ぐ)膝を折り高く舉ぐ、次ぎ

に互に矢と呼びつゝ。

受太刀は舉げたる前足を踏着的

と同時に敵の足を拂ふ、打太刀は刀

を舉げ上段に取ると同時に左足を

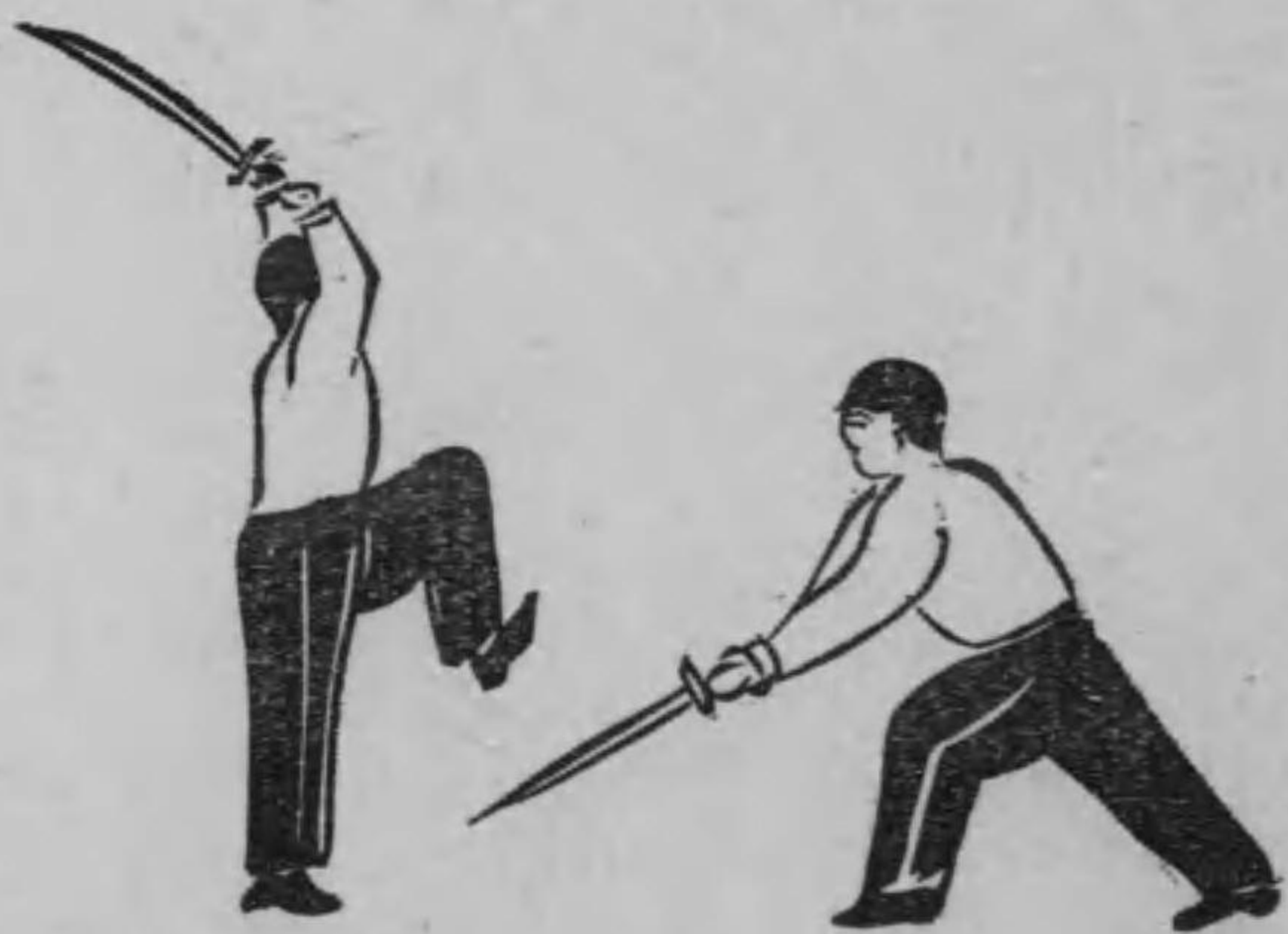
舉ぐ。

太刀筋の注意 撃つ時は刀を斜めに

撃下さず、刀尖を我が體の横に下げ、

地上二三寸の高さを横に拂ひ行くべし。

第 廿 一 圖



● 四本目 太刀拂たちばらひ 肩の運動

双方共に矢と呼びつゝ中段に構ふ。

第一回互に曳と呼びつゝ打太刀は敵刀を右に拂ひ直ちに中段に復す、受太刀は拂はれし刀尖を左に仆されたる儘にす。

互に矢と呼びつゝ受太刀は敵の刀を右に拂ひ直ちに中段に復す、打太刀は刀を左に拂はれたる儘にす。

太刀筋の注意 拂ふ時左構なれば刀尖を右に向くるは勿論なれども其の時柄頭を左に寄すべし。

拂ひて直ちに中段に復することを忘るべからず。

又拂はれたる時敵の刀に抵抗すること無く敵の拂ひたる力に應じて刀尖を寄するを可とす然れども我が力を以て故らに我が刀を左(右)に寄すべからず。

● 五本目 脚撃 背の運動

矢と呼びつゝ双方共に踏込上段に構ふ。

第一回互に曳と呼びつゝ打太刀は左足を踏込むと同時に體を屈め刃を右に向け敵の脚頸を撃つ又直ちに右足を踏込むと同時に體を屈めたる儘刀尖を上げ刃を左に向け兩臂交叉の形にて敵の脚頸を撃つ。受太刀は基本演習の脚受を爲す。

次に互に矢と呼びつゝ打太刀は二歩駆退くと同時に受太刀は二歩駆進むと同時に共に踏込上段に復す。

● 六本目 面の順逆受 腹腰の運動

本節は一回四舉動なるが故に左右とも二回づゝにて止む此の二回の舉動を數字にて唱ふれば八舉動なり。

双方共に矢と呼びつゝ中段に構ふ。

第一回

第一舉動 曳、双方共に後足を進め兩足を揃ふると同時に

打太刀面撃、受太刀面の順受

第二舉動 矢、受太刀面撃、打太刀面の順受。

第三舉動 曳、打太刀面撃、受太刀面の逆受。

第四舉動 矢、受太刀面撃、打太刀面の逆受。

第二回目の終りは互に一步退右足よりきて連續法により構を變ず。又右構の第二回目を終らば互に一步退左足よりき氣を附の姿勢を取る。

●七本目 烏飛カヒトビ 腹腰の運動

互に中段に構ふ。

擊受共其の方法 兩足を揃ふることは前節面の順逆受に同じ、但し異

なる所は烏飛の點に在り、烏飛とは双方擊受を爲すに當り必ず蹲踞し兩足を揃へたるまゝ、飛上り飛下るなり、最初は双方立ちて構へ居る故、其の儘飛上りて飛下る時に擊受を爲しつゝ、蹲踞すべし。

但し一定の位置に居りて擊受を爲すも可なれども、切先を左前隅に向け受くる時は右方に飛下り、切先を右前隅に向け受くる時は左に飛下るを本體とす、又互に左若しくは右にのみ飛下り廻りて舊位に復するも可なり。

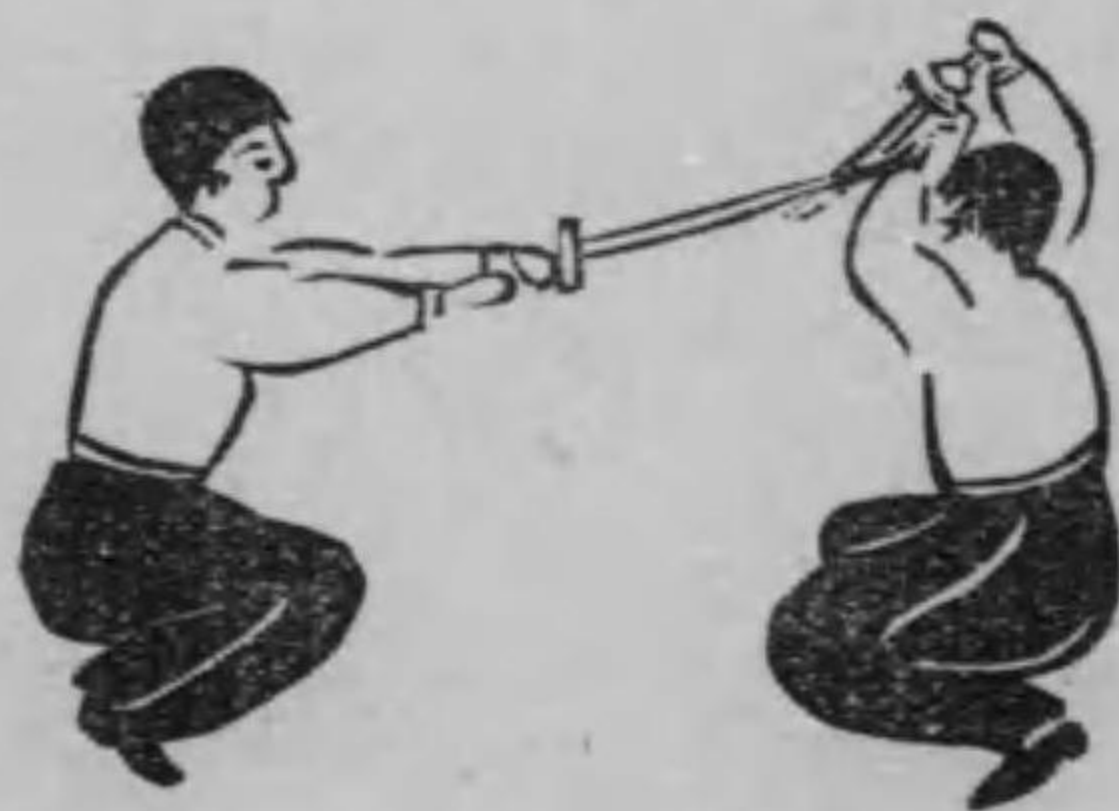
●八本目 胴横腹腰の運動

矢、打太刀中段 受太刀下段。

第一回

曳、打太刀送足にて進み胴の交叉撃、受太刀兩足其の儘にて胴受。

圖 二 廿 第



矢、受太刀胴の交叉撃、打太刀胴受。

第三回目を終りたる時、打太刀は送足にて退き構換法を行ふ。

●九本目 袈裟斬 跳躍運動

矢、八相

第一回

第一舉動

曳、打太刀は飛違進を爲すと同時に、敵の右肩より左腋下に掛け袈裟斬を爲す。受太刀は送足にて飛退き八相の構を保つ。

第二舉動

矢、受太刀は第一回第一舉動打太刀の動作を爲す。

打太刀は飛違退きをなしつゝ左八相に復す。

第二回三回は、双方とも第一回第二舉動(矢)の方法に同じ。

●十本目 駆進突 下肢の運動

矢、中段

第一回

曳、打太刀は二歩駆進むと同時に、敵刀を拂ひつゝ喉を突く。受太刀は太刀を拂はれつゝ二歩駆退く。

矢、受太刀は第一回の打太刀の方法、打太刀は第一回の受太刀の方法を行ふ。

●圓相 呼吸運動

此の運動は其の名も方法も共に直眞影流より取りたる者にて、胸廓を擴め且肩胛關節の活動を圓滿ならしむる者なるを、著者之を呼吸運動に應用せるなり。

矢、左揃足中段に構ふ。

一の令にて兩踵を擧げ吸氣しつゝ、兩手(左手は鐔元を握りたるまゝ)を頭上に擧げ右手を放し、兩手を後方に廻はして左右に平擧す。此の左手に持てる刀の刃は左方に向け、刀尖を外上方に四十五度傾けしむ、右拳は爪を前に向け食指を伸ばす。

二の令にて踵を下ろし呼氣しつゝ、兩手を前方に持來り構に復す。

三の令にて擧踵吸氣しつゝ、兩手を下げ、下方より右手を放し左右共後方に廻はし上げて前項一の姿勢を取り、續いて

四の令にて前項二の動作を爲し揃足星眼に復すると同時に、兩手を換へ右揃足精眼に構ふ。

右構にて前述の動作を一回行ふ。

但し熱鍊せる後は號令を用ゆべからず。

第六章 居合拔 拾本

居合拔は眞劍の操法に習熟せしむるを以て目的とする者なれども、又劍術の連續的擊受にも慣れしむる効果を兼ね、古昔は多く刃引の刀を持ち行ひたる者なり、刃引の刀にて行ふことは最も宜しき事なれども、一學級の兒童數丈け刃引の刀を用意せんことは經濟上容易ならざるを以て、予は木劍に亞鉛の鞘を取着け、以て眞劍に擬し用うることにせり。

本章居合拔は各流より採りたれども、重もに神道無念流より取り、之れに予の工夫を加へたり、

居合拔は一本目(豫令)始め(動令)二本目(豫令)始め(動令)若しくは單に始めの號令を下し、各本個々に行はしめ、連續せざるを本體とす。

●一本目 胴面(三舉動) 上肢運動

始め 氣を附けの姿勢より始む、始むる時は先づ反を打たせ鯉口を寛く、以下倣之。

矢、右足を踏込むと同時に胴の抜撃を爲す。

曳、送足にて進むと同時に左脇卷面撃を爲す。

當、左足より大股にて退き揃足を爲すと同時に納劍を爲す。

●二本目 面、胴、袈裟(四舉動) 上肢運動

矢、右足を踏込むと同時に眞向抜撃を爲す。

曳、左足を踏込むと同時に敵の右胴交叉撃。

當、左足を退くと同時に敵の左肩袈裟斬。

當、右足を退け揃足を爲すと同時に納劍。

●三本目 片足立(五舉動) 平均運動

矢、右足を挙げつゝ留撃。

曳、右足を地に着くると同時に、左足を右腿に挙げつゝ敵の右肩袈裟

斬(交叉撃)。

曳、左足を地に着くると同時に、右足を舉(踵にて臀部を蹴る如く)げつ

ゝ敵の左横面を撃つ(順撃)。

曳、右足を地に着くると同時に、左足を舉(踵にて臀部を蹴る如く)げつ

ゝの右横面交叉撃。

當、左足を地に着くと同時に納劍。

●四本目 前後突(三舉動) 肩の運動及び上肢下肢の敏捷運動

矢、眞向面撃をなし直ちに左足を踏込み喉突(刃を右に向け)

曳、右轉回を爲し左肩を撃ち直ちに送足にて進み喉突(刃を左に向

く)

當、左轉回を爲しつゝ右足を左足に着け納劍。

●五本目 拔面拒(六舉動) 腹背腰の運動

矢、左足を退くると同時に、右片手にて拔放し面を拒ぐ。

但し體を少しく反らせ、刀尖を左方にし頭上にて拒ぐ、是れ急迫の場合に處する受け方なり。

曳、兩手にて刃尖を上右下左方に廻はし脚を拒ぐ。

曳、面の順受けを爲す。

曳、兩足を跳違ふると同時に、刃尖を上左下方に廻し脚を拒ぐ。

曳、面の逆受。

當、右足を進め左足に着くると同時に納劍す。

●六本目 屈拔(六舉動) 腹背腰、手指の運動

矢、右足を踏込むと同時に、右片手にて鏝元を逆手に持ち抜きて、刀尖

を我が左脇より我を抱留めたる後方の敵の腹を刺す。

曳、右足を退くると同時に、右片手にて刀を抜き取り、更に我が右脇より後方の敵の腹を刺す。

但し後方を刺す時我が左掌を柄頭に當てゝ押すべし。

曳、右足を踏込むと同時に、兩手にて握り振冠りて前方の敵の面を斬る。

曳、曳、左轉回を爲し右足を踏込むと同時に面を撃ち、直ちに右足を左方に踏込み左を向くと同時に、右脇卷面撃(中段の姿勢)をなす。

血振ひ 無言にて血振ひを爲す、其の方法左の如し。

柄を振れる左掌を伸ばし、其の四指の腹に柄頭際を當て、左掌にて柄頭際を押撫ぶると同時に、右掌を軽く伸ばしつゝ、縁際を引撫てす、斯く左掌にて押し右掌にて引撫するが故に柄は回轉す、回轉し來る柄

を左掌にて握る時は、刀は一回轉を爲し刃は下を向く。

當、左向(正面)きを爲しつゝ右足を左足に着け足を揃ふると同時に、右手にて鐔元を逆手に持ち納劍。

●七本目 折敷前後撃(三舉動) 跳躍運動

矢、跳上がりつゝ左足を後方に退け右足を前方に出し左折敷を爲すと同時に真向面撃。

曳、跳上がり左轉回右折敷を爲すと同時に、敵の右腕を撃つ(交叉撃)。
當、立ちつゝ右轉回を爲し、先づ右足を定位に踏着他に左足を定位に踏着他に納劍。

●八本目 前後追撃(三舉動) 下肢敏捷運動

矢、右足より駈進み三步目に真向拔撃を爲す。

曳、左轉回を爲し踏込上段に取りつゝ後足(右)より駈進み、三步目に右

片足立(左足を後方に上げ)となり左手を左腰に當つると同時に、右手にて敵の右肩を袈裟斬りす。

當、左足を踏着他足の一少後方にけ左轉回を爲しつゝ、右足を左足に着け納劍す。

第七章 奥之手 六本

一、奥之手は左右一回づつ行ひ、左構より始む。

一、掛聲は斬突部を呼び、受止は矢と呼ぶべし。

一、居合拔として行ふ時は、一本目の括弧内に説明する如く、矢の掛聲にて拔劍し構へ、當の掛聲にて排列位置に揃足となり納劍すべし、即ち四本目、五本目、六本目の如くすべし。

●一本目 面、横面

○打太刀

矢、星眼(拔劍星眼)

御面横面、送足、面擊、横面交叉擊
當、送足退星眼(送足退揃足納劍)

●二本目 脚、面擊拂、脚受

○打太刀

矢、星眼

脚、矢、送足交叉脚擊、面擊拂、前
足上げ上段

當、前足踏着力送足退星眼

●三本目 突、小手

○打太刀

○受太刀

矢、星眼(拔劍星眼)

矢々、送足退、面擊拂、横面受
當、送足星眼(送足揃足納劍)

○受太刀

矢、星眼

矢、御面、脚、前足上げ、前足踏着力面
擊、脚擊

當、星眼

○受太刀

矢、精眼

御突御小手、送足突小手
矢々、送足退左右拂

當、精眼

●四本目 拔面擊

○打太刀

御面、拔劍面擊

脚御面、脚擊、面擊

脚御面、跳違脚擊、面擊

當、退揃足納劍

●五本目 跳退上段

○打太刀

矢、精眼

矢々、送足退右左拂
御突御小手、送足突小手

當、精眼

○受太刀

居合拔五本目拔面受到同じ。
掛聲は最終の當の外、矢のみとす。

矢、拔劍跳退送足上段

矢、拔劍跳進中段

御面、横面一本、矢、送足面、送足交

矢々々、面受、前足退横面受、跳違星

又横面、星眼

眼

矢々々、打落、左胴受、面受

御小手、御面、御胴、送足小手交叉擊、

胴、面

御胴ダ、送足交叉胴續いて前

未だく、跳退外づし木劍

足退木劍片手(縁際握)側面立

(柄頭握)側面立

當、退揃足納劍

當、進揃足納劍

●六本目 跳退中段

○打太刀

○受太刀

矢、拔劍跳退中段

矢、拔劍跳進中段

御小手御面、送足小手面

矢々、送足退打落面擊拂

御突御胴、送足喉突、交叉胴

矢々、送足退、突拂、打落

矢、横面一本、前足退横面受、直

横面、何をく、送足横面、直ちに折

ちに片手(頭握)横面擊

敷横面受

當、進揃足納劍

當、退揃足納劍

第八章 各學年配當

以上第三章より第七章に至るまで述來りたる所の、手解、基本演習、切返、居合拔、奥の手は之を生徒に課する場合は、初年級に全部之を課さず、宜しく其の難易と分量の多少とを考へ、各學年に配當するを可とす、即ち左表に掲ぐる所の學年欄の數字は、尋常小學の三、四、五、六學年を示す者なり、然れども尋常小學時代に課せずして、高等小學に至り初めて課する場合は、三、四兩學年分を高等科第一學年に課し、五、六兩學年分を高等

科第二學年に課す、又小學生時代に經驗なき中學校生徒に初めて課する場合は、第一年生に高一分を課し、第二年生に高二分を課す、高等小學三年生及び中學三年生以上は全部の復習を爲すべき者とす、但し此の配當は、教授者の見込により多少變更するも妨げなし、既に前學年に教授せる分は、今學年の分と共に毎時間實演せしむ可き者なること言を須たず、尋常科第六學年に至れば全部を課すべき者なれども、六學年に至り初めて課する場合は、矢張り三學年の分より始むべし。骨遺劍及び圓相は、尋常四學年に課するが故に、四學年以上の各學級に於ては、兩節とも準備運動又は呼吸運動として、或は毎時間の始めに或は終りに適宜課する事とすべし。

體育流劍術各學年配當表

學年手	解(五本)	學年基本演習(十本)	學年利段切返(十本)	學年中段居合拔(本)	學年上段奥之手(六本)
三 踏込上段面	四 左 右 拂	四 骨遺劍(準備)	三 圓 面	四 面、橫 面	
三 精 眼 面	四 脇 構 肩	四 摺 上 面	三 面、圓、袈裟 面	四 面、橫 面	
三 同 面 受	五 留 手 擊	五 打 落 面	五 片 足 立	四 脚、面 擊 拂	
三 面順受(切返)	五 諸 手 突	五 脚 拂 拂	五 前 後 突	五 突、小 手 擊	
三 橫 面(切返)	六 脚 受	四 太 刀 拂	四 拔 面 拒	五 拔 面 擊	
	六 仰 擊	五 脚 打	五 屈 面 拔	六 跳 退 上 段	
	六 跳 愛	六 面 順 逆 受	六 折 敷 前 後 擊	六 跳 退 中 段	
	六 飛 斬	六 鳥 飛	四 前 後 追 擊		
	六 送 斬	六 袈 斬			
	四 送 斬	六 駝 進 突			
		四 圓 相(呼吸)			

更に之を各學年別にすれば左記の如し。

●手解(五本) 踏込上段面 精眼面 同面受 面順受(切返) 横面(切返)	中小學 一三學 年學生年
●基本演習 左脇横 送脚受 ●切返 脚刀拂 太刀上 摺上 ●居合拔 前後面 後追 ●奥之手 脚、面、横、面、擊、拂	中小學 一四學 年學生年
●基本演習 留手 脚諸手 ●切返 脚脚打 脚脚打 ●居合拔 片前後足 前前後後 折敷前後 ●奥之手 突、小、面、擊、手	中小學 二五學 年學生年
●基本演習 仰跳斬 隅飛折敷 ●切返 面ノ順逆 烏、順、逆 製、裝、受 駢、追、突 ●居合拔 屈、拔 ●奥之手 跳退中、跳退上段	中小學 二六學 年學生年

第二編 體育流薙刀術 一名薙刀體操

本篇は、前篇の劍術體操と同じく、予が明治十六年東京府師範在學中より研究を始め、十五年目の明治三十年八月著はせる、武術體操法中の薙刀體操の部を、復た其の後二十一年間實驗の上、改良に改良を加へ、薙刀術と劍術とを分離して、某々三書肆をして出版せしめしが、更に今回手解五本と初段八本とを加へ、之れを體育の方面より、將又武道の方面より、益々效力多からしむべく、且覺へ易からしむべく改良加除せる者にて、其の間實に三十有六年の年所を経たり、此の三十有六年間の研究實驗は、予をして一層安んじて今回の出版公表を爲さしめたり。

第一章 薙刀ノ部分、種類、稽古薙刀及寸尺

第一節 薙刀の部分

薙刀に中身、鞘、中心、鍔、柄、鐔の六部分あり、左に之れを細説すべし（第一圖参照）

一、中身の部分の名稱は、刀の部分の名稱と同じと雖、薙刀には、必ず冠落として、棟の中途より刀尖に近き部分迄薄くなれる部分あり、刃と反対の部分に刀背又棟とも云ふ。
刀背の頂きに角なきを丸打、若しくは丸棟と云ふ、又刀背の頂き圓からず角なくして平坦なるを、三棟、眞の棟又相州棟と云ふ、相州棟とは相州出來の品に、此の種の者多きが故なり。刀尖は切先、或は銚子とも云ふ。刀背と刀刃とに並行して、身の兩側に鍔際より刀尖に達する稜形あり、

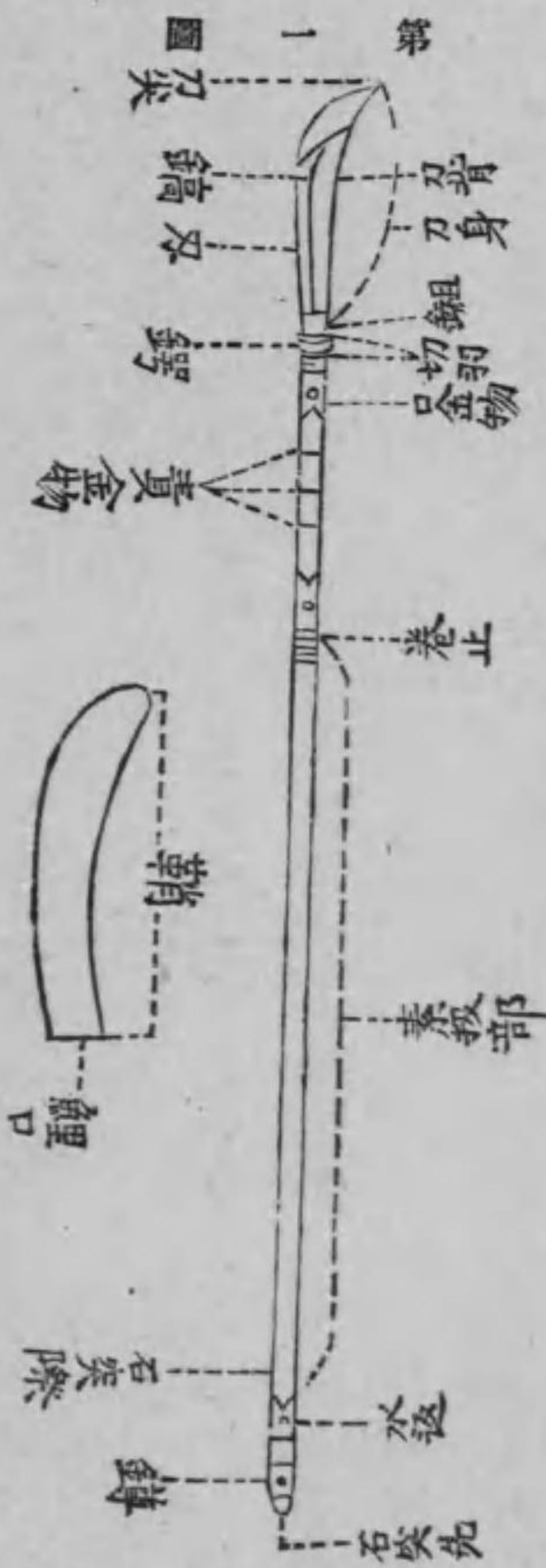
之れを鑄と云ふ、鑄は無きものあり、之れを平打又平造とも云ふ。血流は又樋とも云ひ、凹める條、一條乃至三條位ありて、條の長短不同なる者あり、或は此の條の全く無き者あり。
二、鞘は中身の長さに対応したる者故、大身薙刀を除くの外、何れも短かく、刀鞘に比すれば、栗形なく又鐔の部分の刀尖状をなせるを異なりとす、往々鞘に定紋を畫けるものあり。

三、中心の部分の名稱も、刀の中心の部分の名稱に同じと雖、刀の中心に比すれば、概ね割合長くして稀には鐔に達する者あるを異なりとす、中心は小身とも云ひ、目釘穴一若しくは二、三位あり。刀鍛冶の氏名及び製作の年月を、此の小身に銘記せる者あり、銘記なき者を無銘と云ふ。
四、鍔は刀の如く大ならず、通常食出鍔と稱し、極めて小にして柄より僅かに食出せるのみ。又稀に十字鍔と稱し、圓形をなさずして鍔の食

出部より十字形を出だせる者あり、又稀に普通の刀劍の鑄と同形のものあり、皆上、下に切羽を着け、且つ上部には紐を備ふることに刀に同じ。

- 五、柄は責金物部
- 素扱部に二分せらる、責金物部は通例

鑄より下部、中心の挿入しある部分なり、此の部分には口金物、及一の責、二の責、口金物に近き方より數ふ三の責とて、數箇の責金物、即ち胴輪あり、千段巻止、單に巻止とも云ふあり、一箇若しくは二三箇の目釘穴あり、千段巻止及責金物は、何れも薙刀の柄裂け、中身を脱離せざらしめんが



爲めのものなり。

六、鑄に乳頸形、椎實形、銀杏形、銚形等の種類あり、何れも二三箇の目釘穴あり、又別に少し大なる一箇の穴を穿てる者あり、此の穴は、紐類を濡らして貫き、塀崖等に懸け昇降する等の功用あり、鑄に接して水返しと稱する金物あり、此の金物は體裁の爲めにして差したる功用無きが如し、石突の末端を鑄先と云ふ

第二節 薙刀の種類 稽古薙刀 及寸尺

- 一、大身薙刀とは、中身の長さ三尺内外ありて、柄も之れに適へるを云ふ。
- 二、袋薙刀とは、中心の代はりに圓筒を附着し。之れに柄を挿入せる者なり。

三、鍵付薙刀とは、鐵の細き方柱を鑄下の口金物に接して、表裏に貫け

るものなり。

四、薙刀の一種の如くにして長巻と稱する者あり、此の武器は、長さ刀に長さ柄を着けたる者にて、武藏坊辨慶の持ちたるは、此の長巻なりと云ふ、長巻にも亦或は鍵附着せる者あり。

五、形の稽古薙刀は、全體櫛製にて、薙刀の形狀を備ふる迄にして、鏝なく、貴金物なく、鐫なく、柄と身との境界もなく、只柄、刃、棟、切先の形狀を具ふ。而して鍵付の薙刀には、木製の細き方柱を貫けり、古來薙刀術の形の稽古用薙刀は、即ち此の薙刀なれども、著者が明治三十三年より數回之れに意匠を加へ、形法の稽古薙刀に、鏝の部を黒く塗り、柄を着色し、石突の形を着け、之れを黒く塗り、眞の薙刀に近く模擬せる者を製作せり。此に因りて演者に益々壯快の感を與へ、且つ柄と身との區別判然たるを以て、技術練習上に種々の利便を與ふること少なからず。

六、試合薙刀は、形の稽古薙刀の切先に、毬毛たばを附着せる者あり、又形の稽古薙刀の全部又は身の部分のみに革を被らせたる者あり、又短かき竹刀を中身の部分に取着けたる者あり。全體竹製にして一端を少しく撓め身の形となし、尖端に、毬毛を取着け、身の一部又は全體に革を着せたる者あり、但し身は四本に割るを常とすれども、予は此を十六に割り製作せり、此くすれば、打たるゝも痛さを感じること少なき故なり。

七、薙刀の寸尺 薙刀の長さは、古來流義に従ひ六尺より八尺五寸迄位の者を使用せり、靜貫流の薙刀は、最も短かくして六尺の者を用ひたり、今日一齊教授を爲すに當りては、成るべく短かき方場所を多く要せざる等の利あるを以て、本流にては尋常小學三、四、五、學年には、四尺八寸乃至五尺、尋常小學六、學年以上高等女學校生徒には、長さ六尺の材にて仕上げたるものを用ひしむ。

第二章 準備

準備は普通に行はるゝ方法と異なる所のみを述ぶ。
一、氣を附け

直立して正面を直視し、左手は自然に垂れ、右手は下垂して薙刀を握る(第二圖)

其の方法は右足の外股、前股の境界線にて、切

先を上にし、刃を前にし、鐺を地上五寸許りの高さにて、在らしめ、鐺より凡そ一尺五寸位の部分を把持す。其の把持法は、柄を拇指(柄の左方に當て)と食指中指(柄の外前方に當て)との股に支へ、他の二指を外、少し後方に當て、恰かも筆を握るが如くす、而して下端即ち鐺は、垂直より少しく前方に在らしむべし。



—(四七)—

二、休め

左足を少しく前方に踏出すと同時に、薙刀を下げて鐺を地に着けつつ、右手を扱上げ、乳又は肩の高さに至らしむ。(第三圖)

休息中右足を前方に踏出さんとするときは、先づ左足を定位に復して、後右足を踏出すべし、又踏出せる足を定位に退け、兩足を揃へたるまま休息するも妨げなし。

三、休息より不動の姿勢、
一、氣を附け。

此の號令を聞くや、生徒は左の二舉動にて、不動の姿勢を取るべし。
第一舉動 定位にて兩足を揃へると同時に、左手にて乳の高さの部分を軽く撮み(拇指と四指とにて)、其の拇指を右肩に着け、右手を扱き下ぐ。



—(五七)—

第二舉動 矢と唱へつゝ左手を列中に下す。

四、對面及解散の禮、

演技準備中、始めて氣を附けの姿勢を取りたる時、此の時の禮を對面の禮と云ふ、及び演習を終へ解散せんとするとき、此の時の禮を解散の禮と云ふ、各生徒は教師に對し靜かに敬禮すべし。教師も亦生徒の敬禮を待たず生徒と同時に禮をなすべし、其の方法左の如し。

姿勢を正しくし、視線を教師の目に注ぎ、教師も視線を正面生の目に注ぎ、上部を少しく前方に傾け禮を爲したる後、上體を舊に復し、再び教師の目に注目すべし。但し敬禮の爲め上體を少しく前に傾けたるときは、少しく踵を前方に出してしむ。

第四圖



五、分列及び排列、

教師は「分列線集まれ」の令を下す。

生徒は各定められたる分列線に着く。

次に「開け」進め」の令を下す。

生徒は下圖の如く開く、但し刀刃を前にす、直れの

令にて矢と呼びつゝ氣を附けの姿勢に復す。

又「分列線集まれ」の方法を省き、直ちに「排列位置

に着け」進め」の令を下すを最も可とす。

此の場合及び前項開け進めの場合に於て、缺席生あるとき、他生を以て缺位を補ふと否とは便宜に従ふべし。

六、狭所演習に間隔を取る方法、

分列を作りたる後、教官は左の號令を下す。

第五圖



一、小間隔左へ。

一、進め。

此の號令を聞くや、各生徒は左手にて右肩の高さの部分握り右肩に着け、右臂を右に伸ばし、右掌を下にすも伸ばし、指頭を右隣生の肩に觸れしむ。

直れゝの令にて

一、右手を下垂して薙刀を握る。

二、左手を列中に下す。

尙ほ場所狭き時は、我が指頭を右隣生の肩上に載せ頸に觸れしめ、又は整列の儘の間隔にて演習せしむ。

或は散在せる生徒に對し、直ちに「小間隔排列位置に着け、進め」の令を下すも可なり。

七、藝禮

藝禮とは、教師と生徒との別なく、互に演習の終始に行ふ禮にして、排列位置を取りたる後ち、或は「終り」の號令下りたる後ち、靜に行ふべき者なり。其の始業の時行ふを始業の藝禮と云ひ、終業の時行ふを終業の藝禮と云ふ、其の方法左の如し。

一、氣を附けの姿勢にあるとき、右手にて薙刀を前方に仆し刃を内にして右脇に置き前後に一直線ならしめ、兩膝を屈し兩足を爪立て、(女子は、土間に非ざる場所なれば兩膝を地に着くるも可なり)臀部を兩踵にて支へ、兩掌を兩膝上に置き、上體を正直に保ち、視線を正面(眼の高さ)に注ぎ、對向者又は教師に注目す。

二、徐ろに兩掌を下げ、指頭を僅に地に觸れしめ、上體を屈めて禮を爲す。

三、徐ろに上體を直立せしめて一の姿勢に復し注目す。

四、右手にて薙刀を取り起ちつつ矢と呼び、氣を附けの姿勢に復す、熟練せる後ちは舉動を唱へずして、肅々として一齊に行はしむべし。

八、閉列、
終業の藝禮を行ひたる後ち列を閉ぢしめんと欲する時は、教師は左の號令を下す。

- 一、右前隅詰め
- 一、進め

此の令にて各分列生は、駈歩にて右前隅に整列す。

第三章 手解五本

手解は、敵味方相對し各節左右一回宛行ふべき者故、先づ左構動作を一回行ひ、續いて構換法により右構動作を一回行ふ、説明は左構動作のみに止む、又熟練せる後は各節を連續施行すべし。

- 一本目 はつさうあはせ 八相合 準備運動

本節は、敵を撃つに非ず自らを拒ぐに非ず、八相の正しき姿勢より、徐々三步進退し正しき中段に構へ、正しく合はすること及び徐々進退して、沈着の態度に慣れしめ、沈着の精神を養ふに在り。

○打太刀 矢、打太刀受太刀共に八相に構ふ(第六圖○)

第一舉動 徐々進み、三步目に徐々中段に構へて受太刀の中段に合

はす(同圖三)。

第二舉動 徐々退き、三步目に左
入相に復す。

○受太刀 打太刀に異なる所は、進
退を反對にするのみ。

●二本目 脇構横面

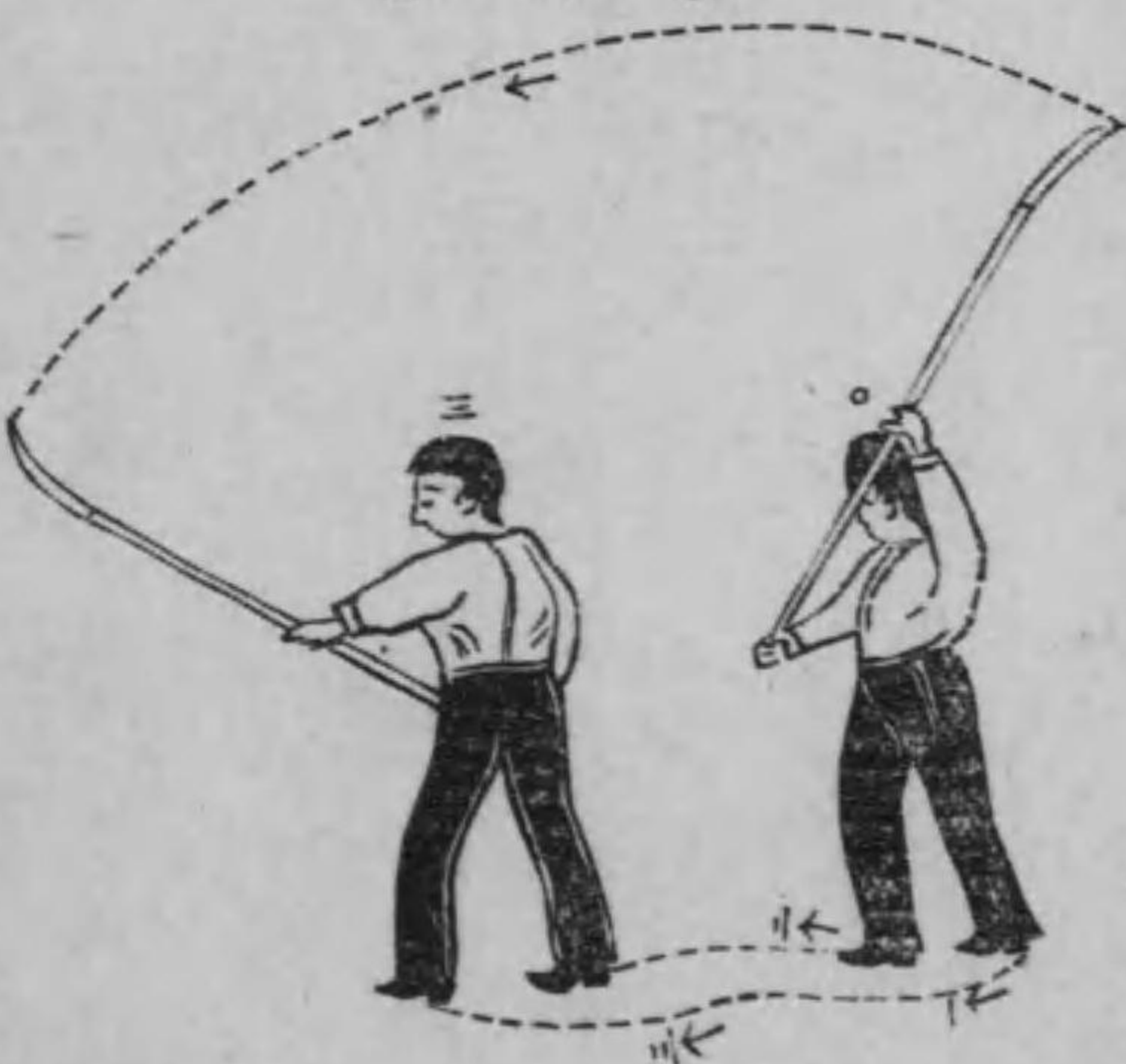
矢、脇構

○打太刀

第一舉動 徐々進み、三步目に曳
と呼びつゝ敵の右横面を斬る。

(第七圖二は二歩目の姿勢、同圖三は斬りたる姿勢なり)
第二舉動 徐々退き、三步目に矢と呼びつゝ脇構に復す。

圖六第



圖七第



○受太刀 打太刀と進退を反對にす、但し熟練
せる後ちは刀背にて受くべし、又鎧にて受く
るも可なり。

●三本目

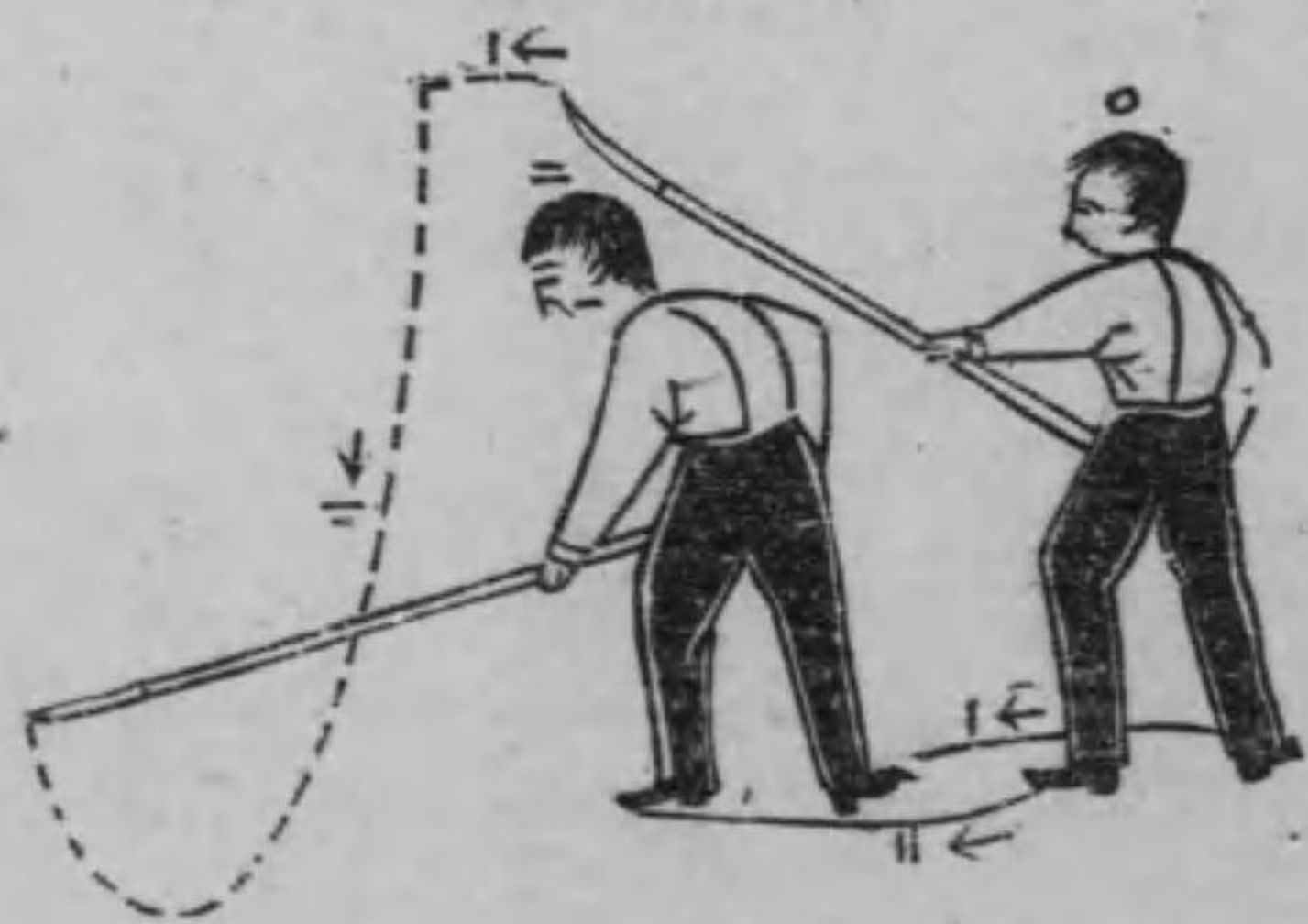
中段脚

矢、中段

○打太刀

第一舉動 徐々進
み、二歩目に曳と呼
びつゝ敵の脚を斬
る。(第八圖二)

圖八第



第二舉動 徐々退き、二歩目に矢と呼びつゝ中段に復す。

○受太刀 打太刀と進退を反對にす、但し熟練せる後は刀背にて受く、又鎧にて受くるも可なり。

●四本目 霞上段面

矢、霞上段

○打太刀

第一舉動 徐々進み、二歩目に曳と呼びつゝ敵の面を撃つ。(第九圖二)

第二舉動 徐々退き、二歩目に矢と呼びつゝ霞上段に復す。

○受太刀 打太刀と進退を反對にす。

●五本目 面脚拒めんあしよせぎ 大勝に慣れ、送足の豫備をなす。

第九圖



矢、大勝にて踏込み霞下段に構ふ。

打太矢受太刀共に同じ動作を行ふ。

第一舉動 曳々と呼びつゝ面脚を拒ぐ(第十圖)

第二舉動 矢と呼びつゝ後足より大勝にて退き、氣を付の第一姿勢となる。

熟練せざる内は、第一舉動を分解して二舉動に行ふべし。其の方法左の如し

分解第一舉動、面拒

左肘を體より離すこと無く曳と呼びつゝ

右手を右側方(少しく前)より臂を伸ばし下げて軽く我が右股を打つ(第十圖一)左すれば薙刀尖は我が左方に楕圓半環を畫くべし、刃は下向なれども少しく左方(脊)に向けしめ鎧にて受止む。

第十圖



分解第二舉動脚拒

曳と呼びつゝ右手を舉げ霞上段に復す(第十圖二)左すれば薙刀尖は上げたる時と同じ太刀筋を通りて下がる、但し刃は上向なれども少しく左方(背)に向けしめ鎧にて受止む。
面拒脚拒共に鎧にて受止むるは、刃を損傷せざらしめん爲めなり。

第四章 基本演習十本

基本演習は、左右構動作各三回づゝ行ふ、但し風車、水車の回数は例外なり、先づ左構動作を三回行ひ、構換法により右構動作に移り、熟練せる後は連續法に従ふ。

左に各節左構動作のみの説明をなす。

●一本目 立構面 首、胸、

上肢の運動

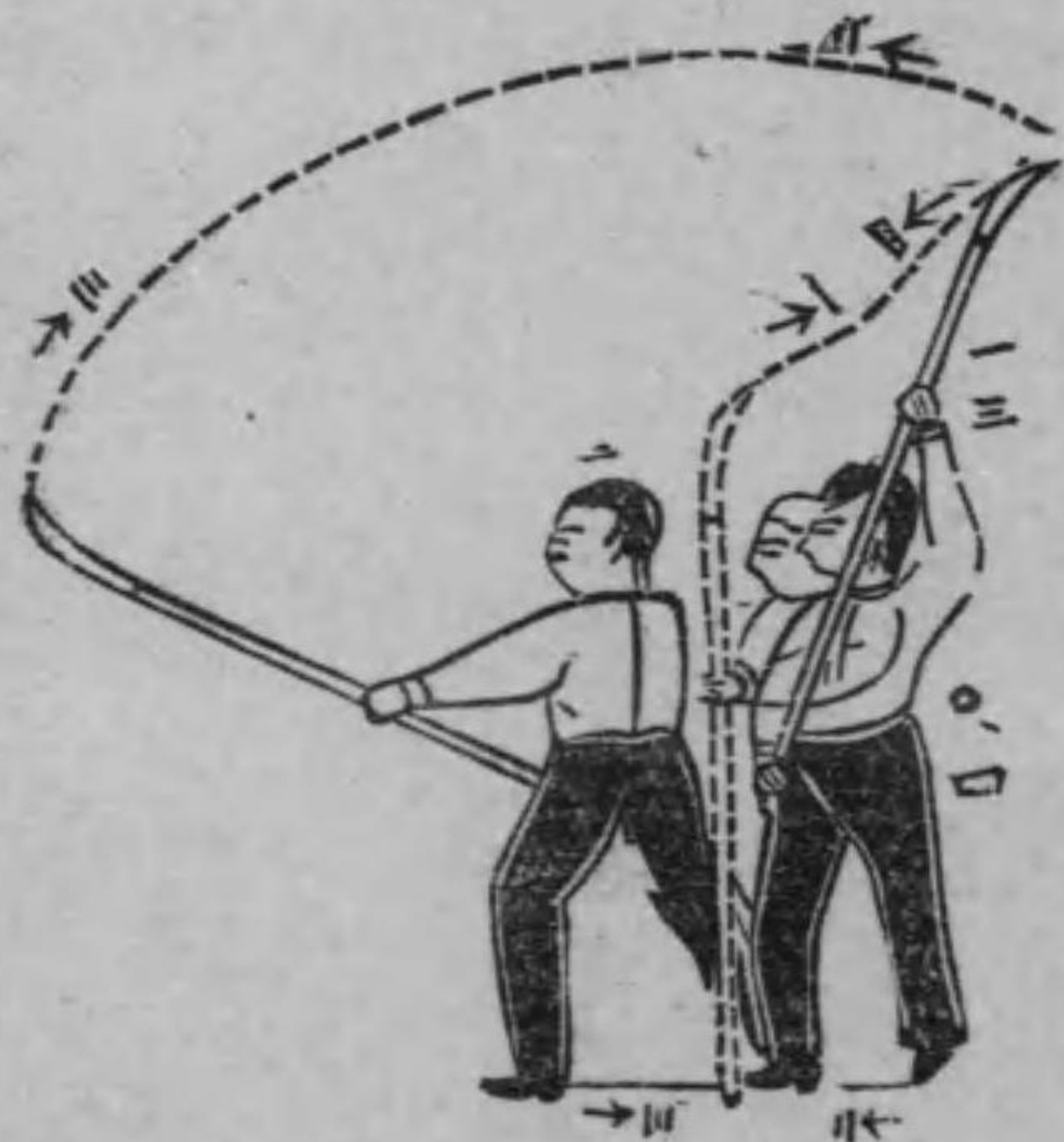
矢、左足を退け左立構、

曳、左足を踏込み中段の姿勢となり

て敵の面を斬る(第十一圖二)

方法 左足を踏込むと同時に、左手

第十圖



を頭上に舉げ右手にて鐔を握り(同圖一三)刀尖を前方に運びて敵の面を斬る(同圖二)此の時左手を少しく鐔の方に扱くべし。

矢、左足を退け左立構に復す。
方法 左足を退くると同時に、右手を左下方に下げ左手を頭上に扱上げ(同圖一三)直ちに右手を右腰に取ると同時に、左手を下げ左立構に復す。

●二本目 上段肩 首胸、上肢の運動

肩を撃つは、肩より腋下に掛け袈裟斬りする者なり、故に本節は上段袈裟斬と名つくるも可なり、以下肩斬りは袈裟斬りと同一なりと心得へし。

矢、左踏込上段、
曳、左足を踏込むと同時に、刀尖を上前方に廻し敵の肩を撃つ。(第十

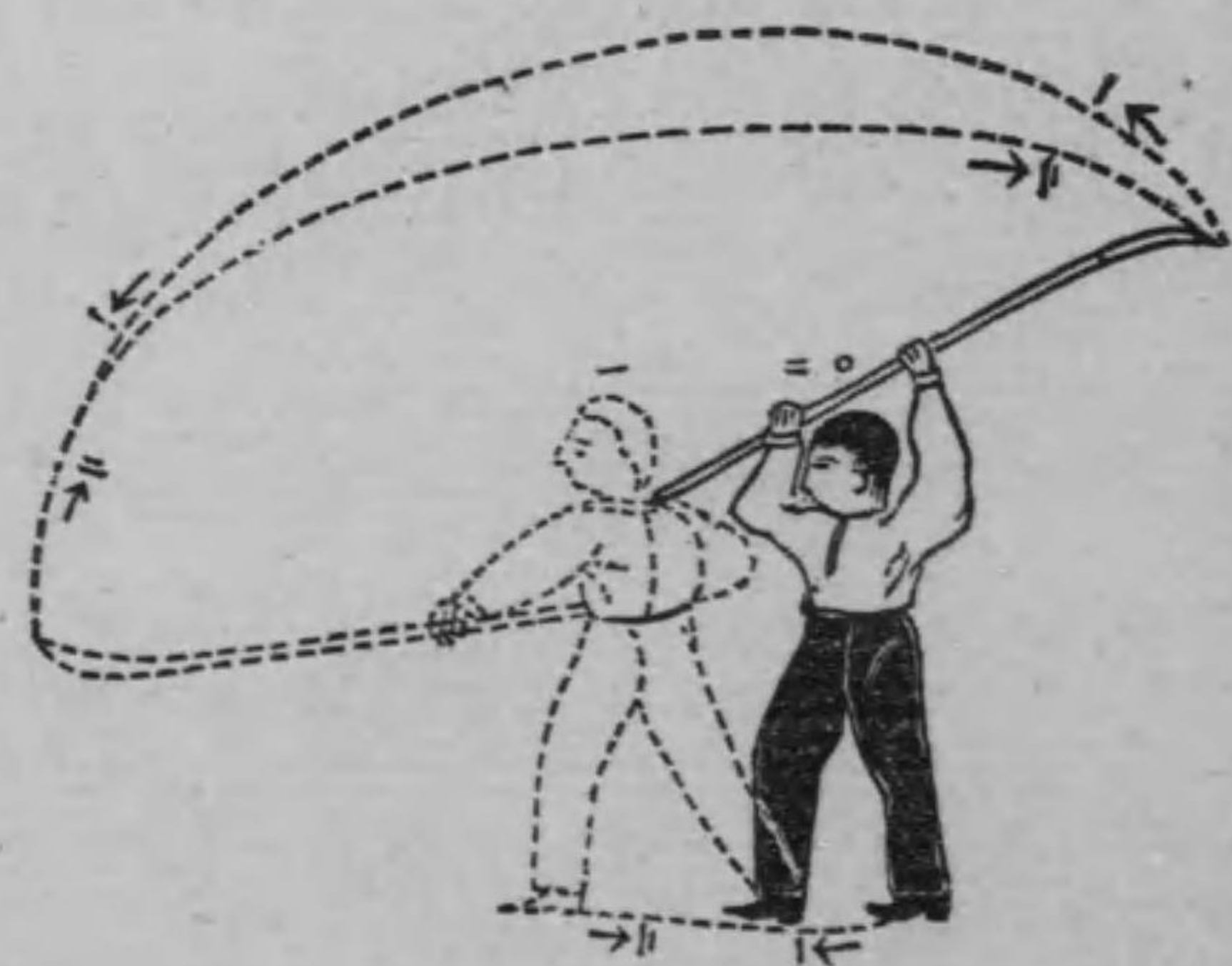
二圖一

矢、左足を退け左踏込上段に復す。

注意 撃つ時は、先づ右手を鐔に扱き續いて左手を適宜に扱く、構に復する時は、先づ左手を舊握部に扱き續いて右手を舊握部に扱く。

- 三本目 胴打 上肢の運動、手の運動、肩指、腕關節、肩

第二十圖



肘關節の運動

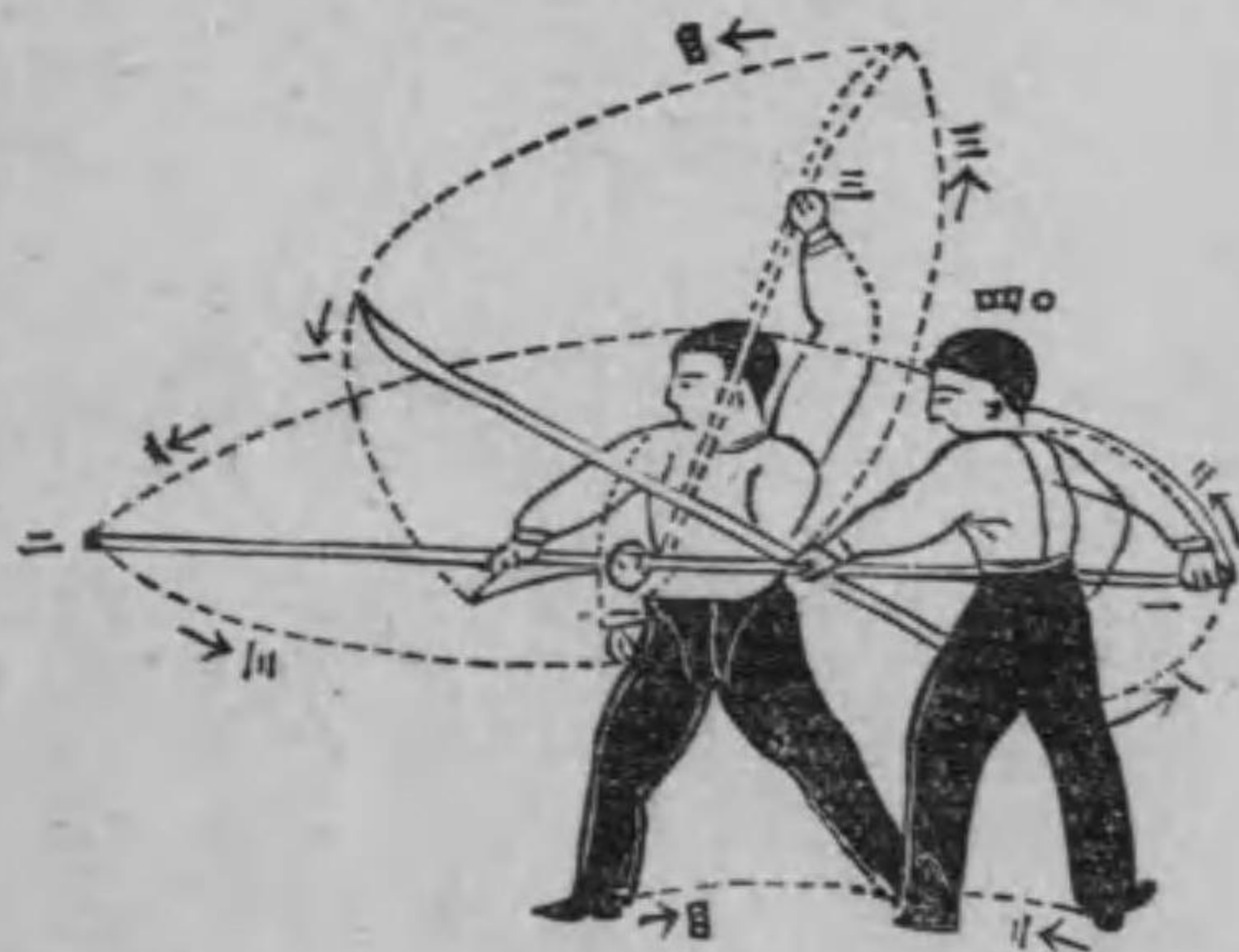
矢、左中段(第十三圖○)

曳、右足を踏込むと同時に、鐔にて敵の左腕を打つ。(同圖二)

矢、右足を退け中段に復す。

肘撃の方法 右足を踏込むと同時に、鐔を少しく上げて薙刀を水平にしつゝ、左掌内を滑らし右後方に引き、左手にて鐔より八寸位の部分を握り(同圖二)、右手を左手の三四寸前まで扱きつゝ、鐔を右前方に廻し、敵の腕を打つ。(同圖二)

圖三十第



中段に復する方法 左手を頭上に上げ、右手にて鐔を握り(同圖三)、左手を扱きつゝ、前足を退け中段。

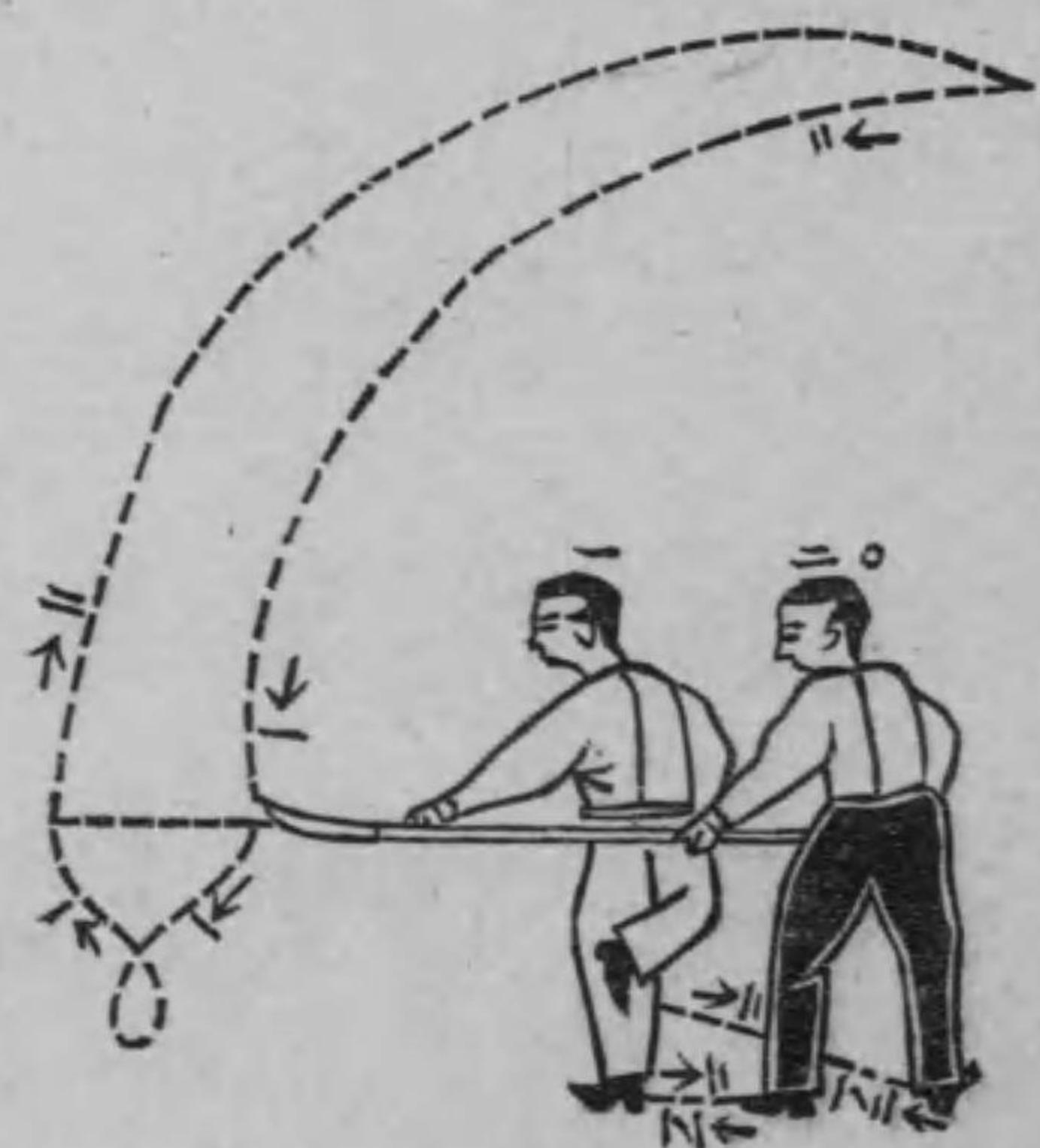
●四本目 下段腰

平均運動

矢、左下段

曳、前足にて跳込みつゝ、後足を臂部を蹴る如く上ぐると同時に、敵の右腰を斬る。(第十四圖一)

圖四十第



矢、上げたる後足より退きつ

ゝ、薙刀尖を上げ、幹竹割の方法にて下段に復す。

腰斬の方法 薙刀水平のまま、鐔を右方に運び(刀尖は自然左方に向

くつゝ刃を右に向け、直ちに力を入れ、鐔を右腰に復せしむ、此の時前手は上下せず、又左右に寄すべからず。

●五本目 突 肩の運動

矢、左中段、

曳、送足にて進むと同時に、鐔を

左手まで押し出し、敵の喉を突き、

直ちに刀を引き中段。(第十五

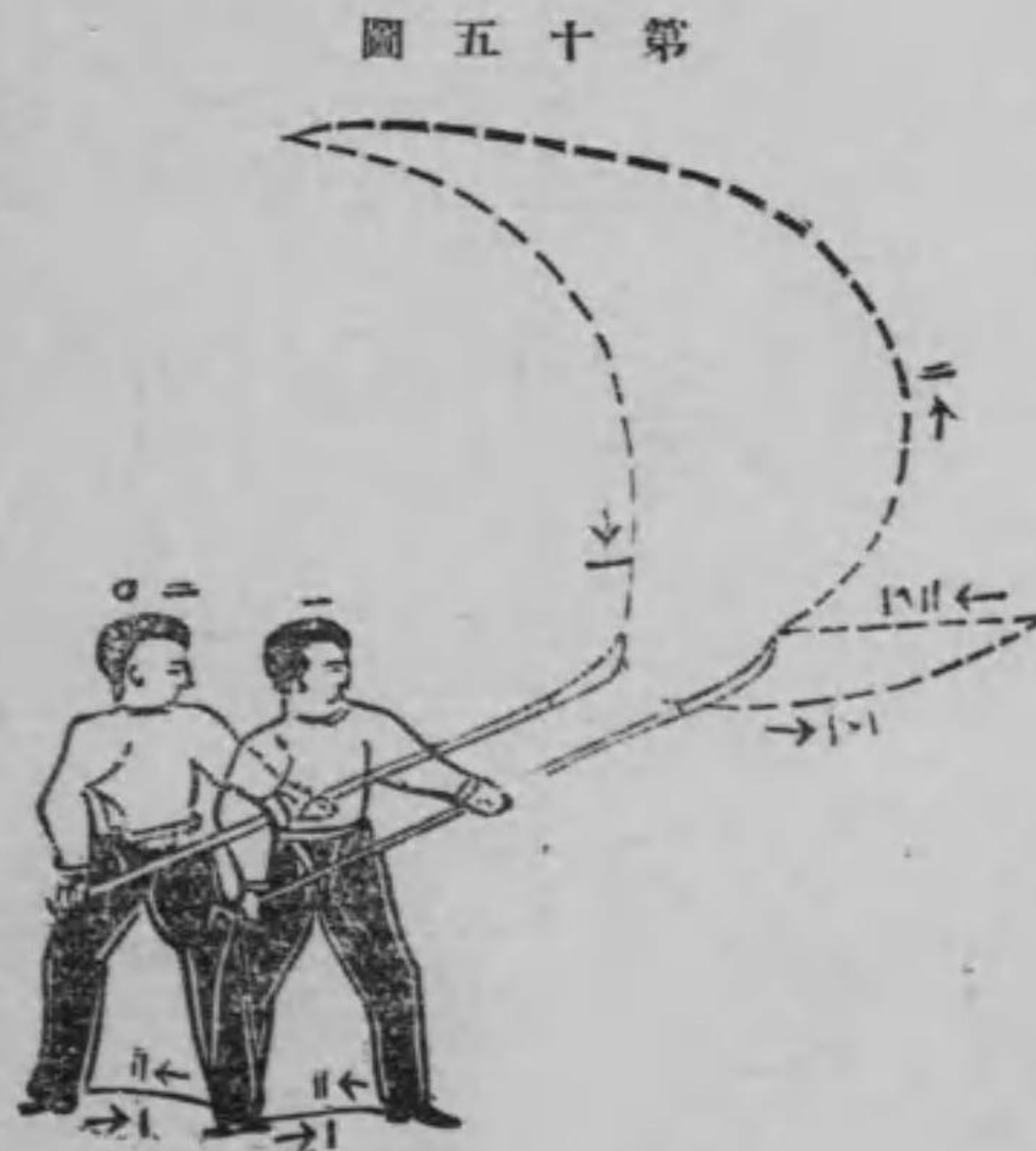
圖一)

矢、送足にて進むと同時に、薙刀

尖を上げ、中段面撃の方法にて

中段に復す。(同圖〇、二)

注意 突出す時、薙刀を後方に引くべからず、前手の肘を屈すべから



ず、前手の握りを自體の方に扱くべからず。

●六本目 打落 背、腹、腰、頸の運動

矢、左霞上段第十六圖二、〇)

曳、送足にて左後隅に退くと同時に、體を屈め

つゝ、薙刀を両手にて下げ、突來る敵の薙刀を

打落す。(同圖一)

矢、送足にて舊位置に進みつゝ、左霞上段に復

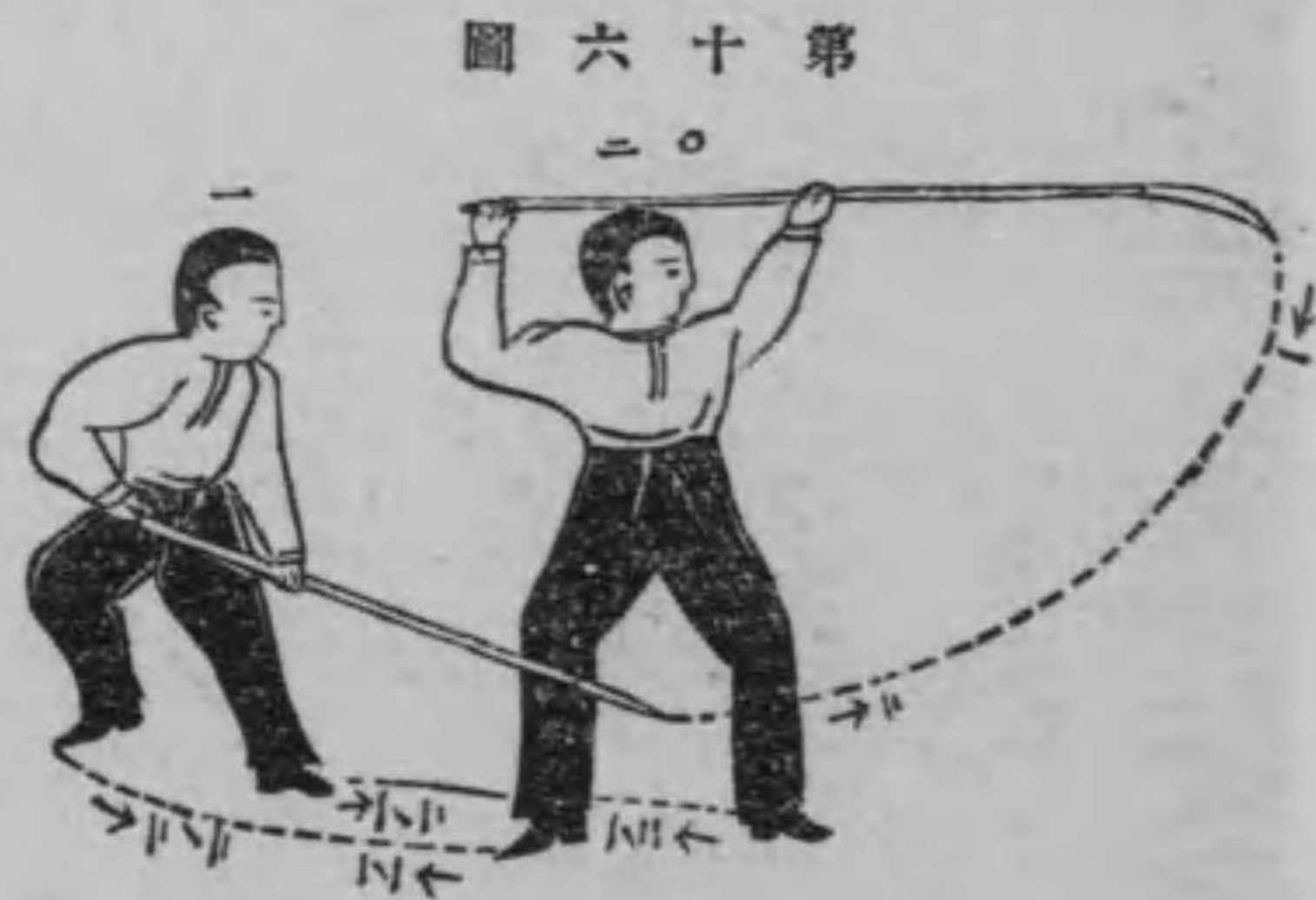
す。

打落の方法 薙刀を下ぐる時は、兩手を同時

に下ぐべし。薙刀を下げる時、刀尖は右前隅を向き地上より二

三寸の高さにあらしむ。刃は打落しつゝ、右、下を廻り左上方を向

く。打落したる時我が刀尖を注視せず、頭を上げて敵に注目すべ



し。

●七本目 風車 進退風車 反身風車 手指の運動、背、腹、腰、下肢の運動

(甲) 進退風車 進むを二回、退くを二回行ふ、

矢、左中段、

(一) 曳 後(右)足を踏込むと同時に、刀尖を體の左側に於て下、後、上、前方に廻しつゝ、兩手を握換へ面を撃つ。(左構なる故、薙刀を體の左側に廻す)

(二) 曳 後(左)足を踏込むと同時に、刀尖を體の右側に於て下、後、上、前方に廻しつゝ、兩手を握換へ面を撃つ。(右構なる故、薙刀を體の右側に廻す)

(三) 曳 前(左)足を退けつゝ(一)の方法に従ふ。

(四) 曳 前(右)足を退けつゝ(二)の方法に従ふ。

續いて反身風車を、左右交互に四回、踏違にて其の場に於て行ふ、踏違とは前足を退け兩足を揃へ、直ちに他の一方の足を踏込むを云ふ。

(乙) 反身風車

曳、左足を退け兩足を揃へ爪立ち體を反らすと同時に、刀尖を體の左側に於て下、後、上方に廻しつゝ、左手を頭の後上方に挙げ、同時に右手を抜き左手の握部を握り左手は右手に添ふ(第十七圖)續いて右足を踏込むと同時に面を撃つ。
二回目、四回目の前項と異なる所は、手足共に左右反對の別あるのみ。

第十七圖



注意 薙刀尖を體側に於て廻す時は、體に近づけ前後に一直線内に

於てすべし。兩足尖を爪立て體を反らす時は、膝を少しく折るを可とす。反身風車を行ふ時の踏違は、知らずくの間に進せざる様すべし、即ち前足の側部中央を、後足の踵に當つる様退くべし、然る時は、前進せず又後退せず。

● 八本目 水車 手指、腰の運動

左中段、
曳、踏違を爲すと同時に、刀尖を體の右側に於て上、後下右、前方に廻し、敵の脚を斬る。(第十八圖一)

圖 八 十 第



此の如く左右交互に六回行ふ。

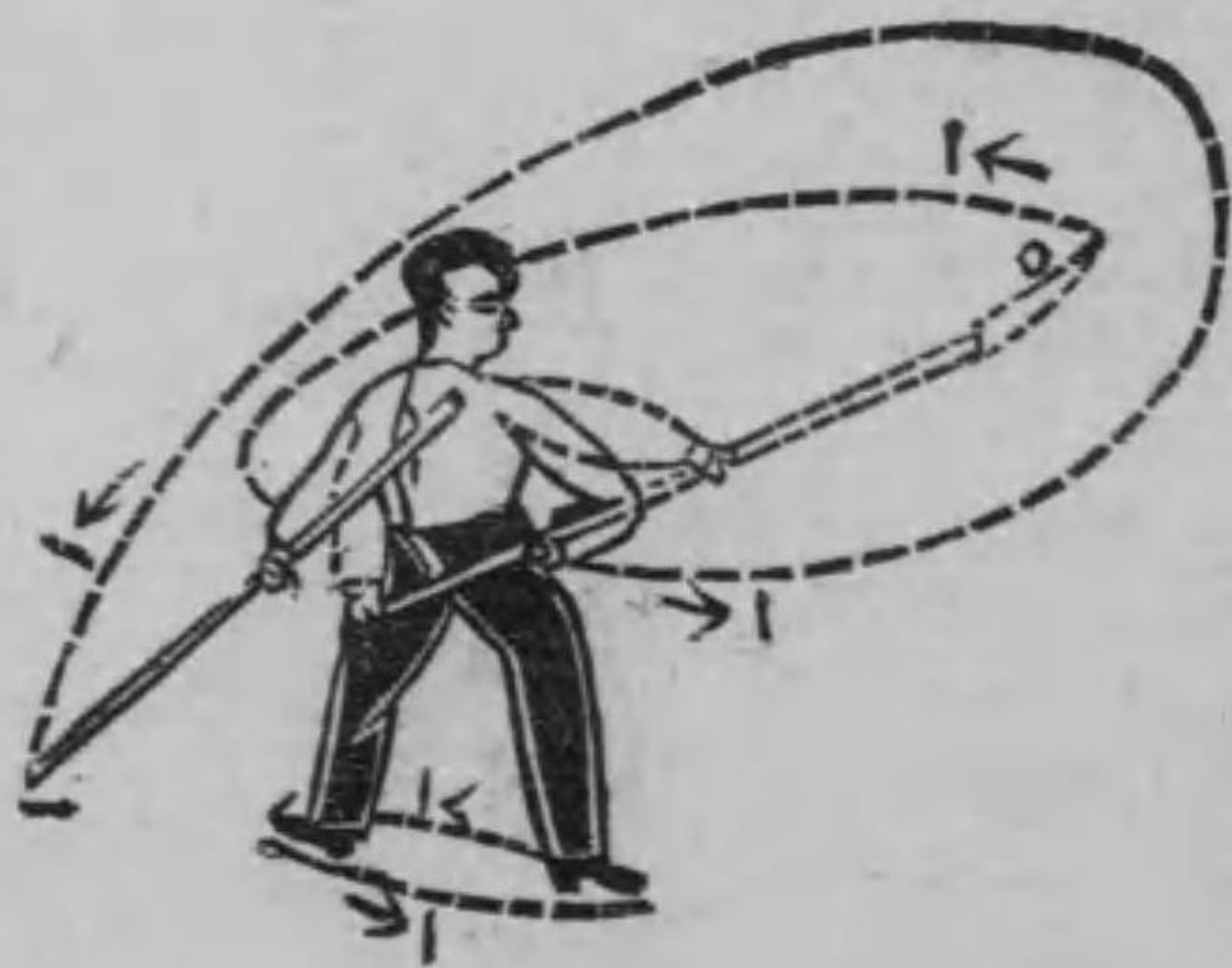
脚斬の方法 左足を退け兩足を揃ふると同時に、右手にて刀を押しつゝ扱きて左手の握部を握り、同時に左手を扱きて鐙を握る、左すれば、刀尖は上、後、下方に至る、直ちに右足を踏込むと同時に、刀尖を右前方に廻し、敵の脚を斬る、脚を斬る姿勢は、半身にて腰を折り、顔は下げずして敵の面を見る。

● 九本目 跳斬 跳躍運動

矢 左中段、

曳、跳違ふると同時に、刀尖を下、左後、上、右前、下、左後方に廻しつゝ、右手を放し、左片手にて肩を袈裟斬りす。(第十九圖)

圖 九 十 第



矢、跳違へつゝ、刀尖を前上方に上げ兩手にて面を斬下ぐ。

注意 教授の始めは、跳違法によらず踏込法により袈裟斬を爲すべし。跳違法は兩足尖にて踏着くべし。又熟練せる後は、跳違進退跳斬を爲すべし。

- 十本目 膝擲 下肢、上肢、手指の運動

矢、左揃足乳間

曳、右足を踏込むと同時に、鐙を下、前、上方に出し、敵の膝を擲ひ畢丸を打つ。(第二十圖一)

矢、右足を左足に着け、兩足尖にて立つと同時に、左手は上げ右手は右

圖 十 二 第



乳下に持來る(同圖二の一)續いて兩踵を下すと同時に、左手を左乳上部に扱下げ構に復す。

膝擲の方法 右足を踏込むと同時に、左手を鐙の凡そ八寸近くまで扱上げ、直ちに其の左手を下げ右手を左手の三四寸前まで扱きつゝ、兩手にて鐙を前方に出だし膝を擲ふ。

● 呼吸運動

呼吸運動は必ずしも行ふを要せざれ共、左の二方法を述べ、何れを行ふも可なり。

○ 山字形

劍術山字形の方法に比し、左手にて握るの差ある外同じきを以て、説明を略す。

○ 十字形

用意 左手にて薙刀の中央部を握り、右手も握り、爪を相對せしめ前伸す。

第一舉動 鼻孔より吸息しつゝ、徐々兩手を左右に平伸し成るべく胸を開く(右手は掌を伸ばし掌を前に向かしむ)

第二舉動 呼息しつゝ、徐々兩手を前方に運び、將さに舊位置に復せんとするや否や、急速に左手の薙刀を右手に投げ渡し、用意の姿勢となる。

此の如くして四回行ひ氣を附の姿勢となる、但し演習者は呼唱せざることを勿論なり。

第五章 初段 八本 薙刀合及太刀合

薙刀術に於て、薙刀と合はするを薙刀合なぎはたあはせ又相薙刀あひなぎなたと云ひ、太刀と合はするを太刀合たちあはせと云ふ、故に本章に於て、薙刀の打太刀に對し、薙刀にて受くるを薙刀合と記し、太刀にて受くるを太刀合と記せり。

初段各節は、左右一回づつ之を行ひ、左構動作より始む。

説明は左構動作のみに止む。

生徒に、初めて初段を課する場合には、先づ薙刀合を課し、次ぎに太刀合を課すべし、而して兒童が熟練する迄は、打太刀たるか、受太刀たるかを一定し、變更せざるを可とす。

● 一本目 一文字之亂みだれ 準備運動

本節の名稱、方法は共に天道流より取る、

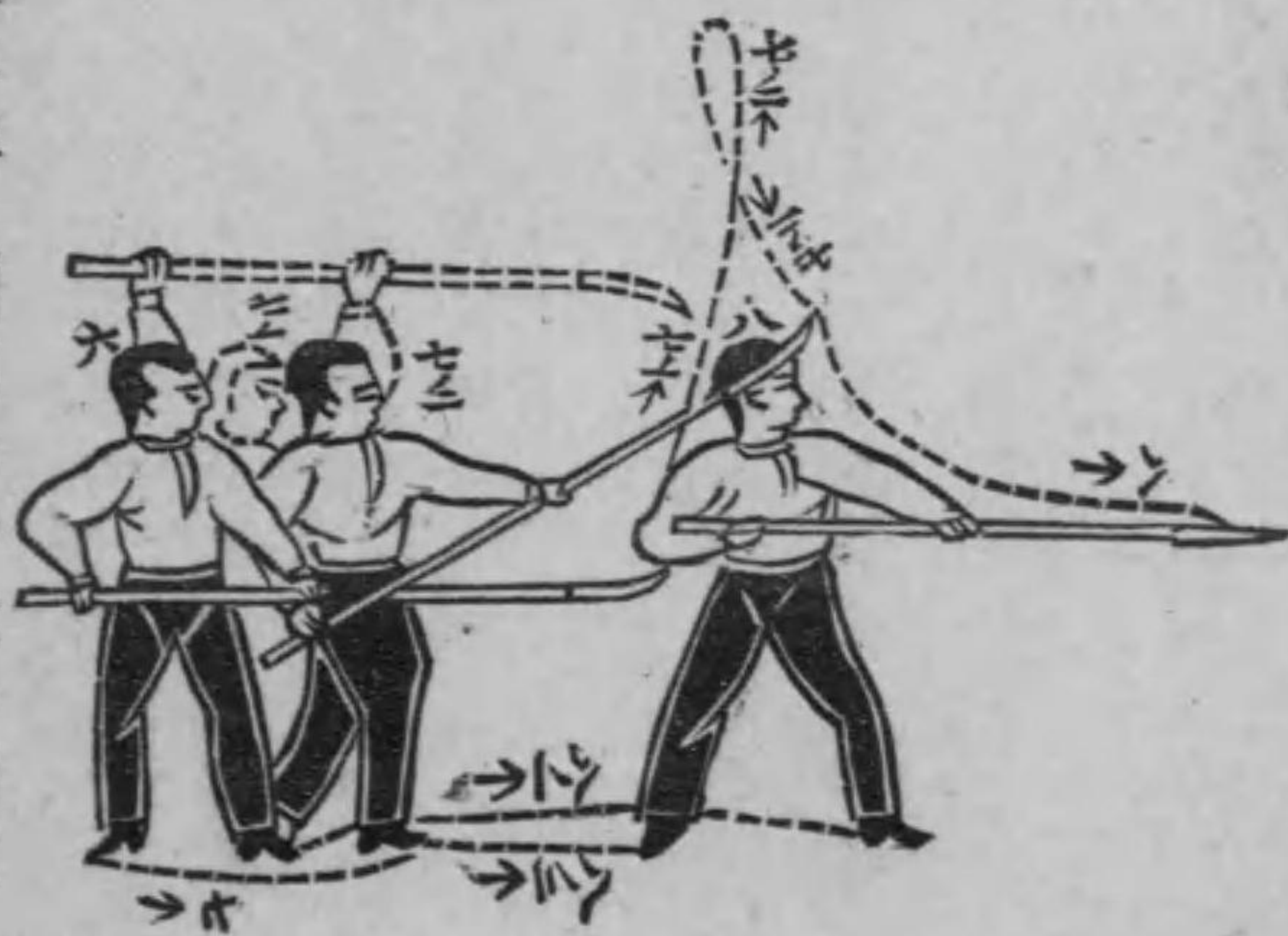
○打太刀

矢、左下段 此の下段は、鐙を二三寸
餘し持ちて、持ちたる手を體より二
三寸後方にあらしむ。

次ぎに無言にて徐々前足(左足)より
二歩退き、三步目に前足(左足)を右足
の前際に着け爪立て、續いて爪立て
たる左足を進め、尙右足より二歩進
み(第二十一圖六)、三步目に

矢曳、矢と唱へつつ、急速に右足を踏
込み足を交叉せしむると同時に、霞上段に取る(同圖七の一)や否や、
曳と唱へつつ、直ちに面を撃つ(同圖七の二)。

圖 一 十 二 第



注意 足を交叉せしめたる時の後足は爪立つべし。

當、左足より大勝にて踏込むと同時に、鐙を右乳下に持來り、薙刀を水
平に平(刃左方)にし、敵の胸を突く(同圖八)。

注意 突きたる時、左右手は少しも扱くべからず。

次に無言にて徐々前足より退き、四歩目に左下段に復す。

○薙刀合

矢、左八相

薙刀の打太刀と異なる處は、進退を反對にするに在り、即ち左足より
二歩進み、三步目に左足を右足の後際に着け爪立て、續いて左足を退
け、右足より二歩退き、三步目右足を退くると同時に、矢曳と唱へつゝ
面撃に合はす。

當、送足にて退くと同時に、突來る敵の薙刀を右に拂ふ。

次ぎに無言にて徐々右足より二歩進み、三步目に右足を進め左足に着け、左足を退け左八相に復す。

○太刀合

構へ、動作凡べて薙刀合に同じ。

注意 進退は、打太刀受太刀共に遅速なく、同時たるべし。

●二本目 面、横面 上肢の運動

二本目より六本目迄は、打太刀の技を取り名づく。

○打太刀

矢、中段

曳々、曳と呼びつゝ送足にて進み面を撃ち(第廿二圖の一)直ちに曳と

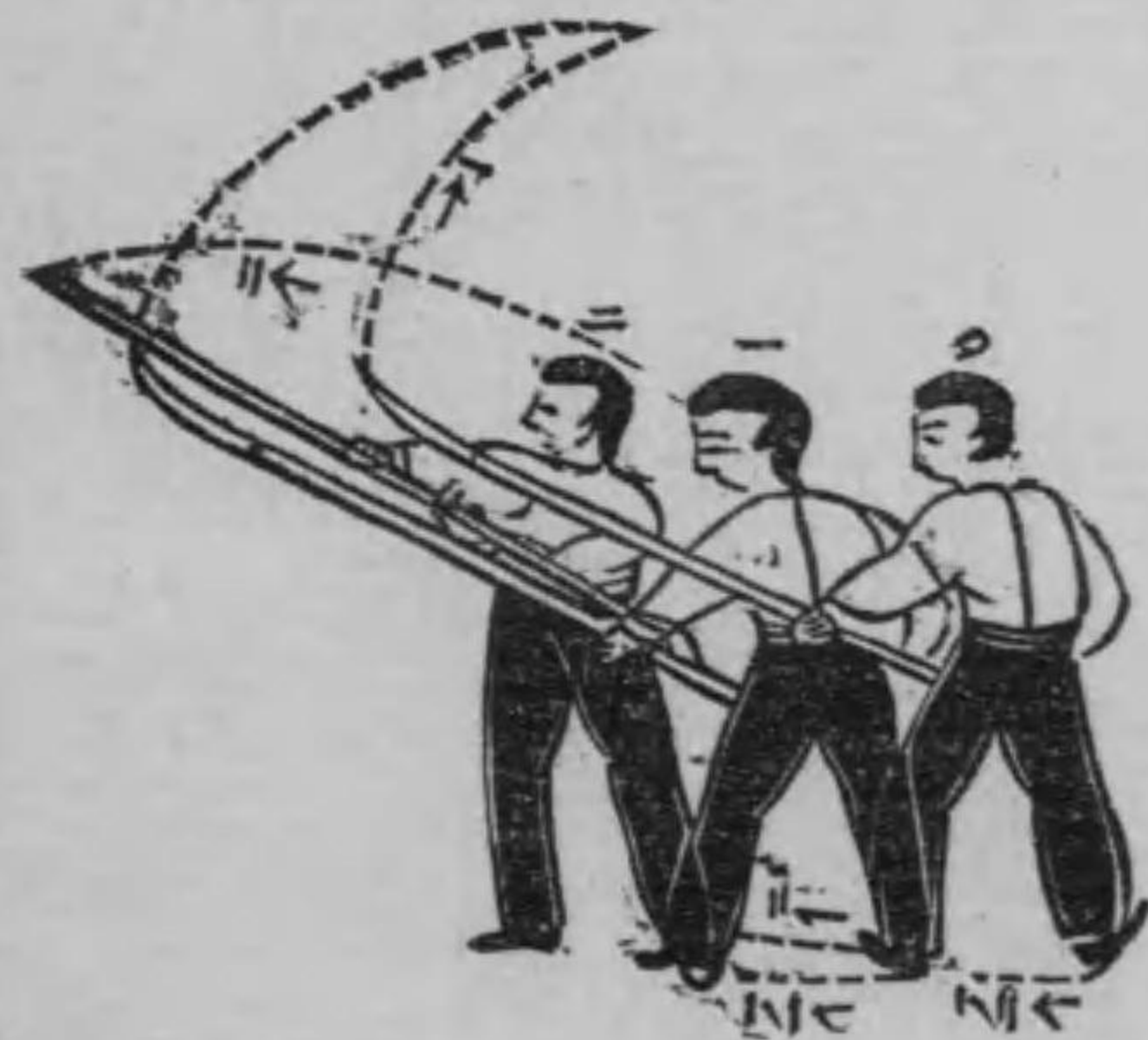


圖 二 十 二 第

呼びつゝ後足を踏込み、胸撃の方法にて敵の横面を打つ(同圖二)。

賞、前足より大股にて退くと同時に、面撃の方法にて精眼に復す。

○薙刀合

矢、中段

曳々、曳と呼びつゝ送足にて退くと同時に右に拂ひ、直ちに曳と呼びつゝ左横面を受止む。

注意 右に拂ふは鎗にて拂ひ、左横面受は柄の腹にて止む。

賞、送足にて進むと同時に精眼に復す。

○太刀合

薙刀合に同じ

●三本目 腰々拒 平均運動

○打太刀

矢、星眼

曳々、曳と呼びつゝ跳進み後足を舉ぐると同時に、腰を撃ち基本演習下段腰の方法、直ちに曳と呼びつゝ跳退き前足を舉ぐると同時に、腰を拒ぐ(手解五本目脚拒の方法)。

當、前足を踏著け星眼。

○薙刀合

矢、中段

曳々、前足を上げ腰を拒ぎ直ちに跳進みつゝ後足を上げ腰斬り。當、上げたる後足より跳退きつゝ、面撃の氣勢にて星眼。

○太刀合 薙刀合に同じ。

●四本目 脚、面撃拂 打太刀は背、腹、腰の運動。受太刀は平均運動。

○打太刀

矢、左片手開かたてびらき(第二十三圖右○)

曳々、左足を踏込むと同時に、左片手にて脚を拂ひ、直ちに面撃を右に拂ふ。

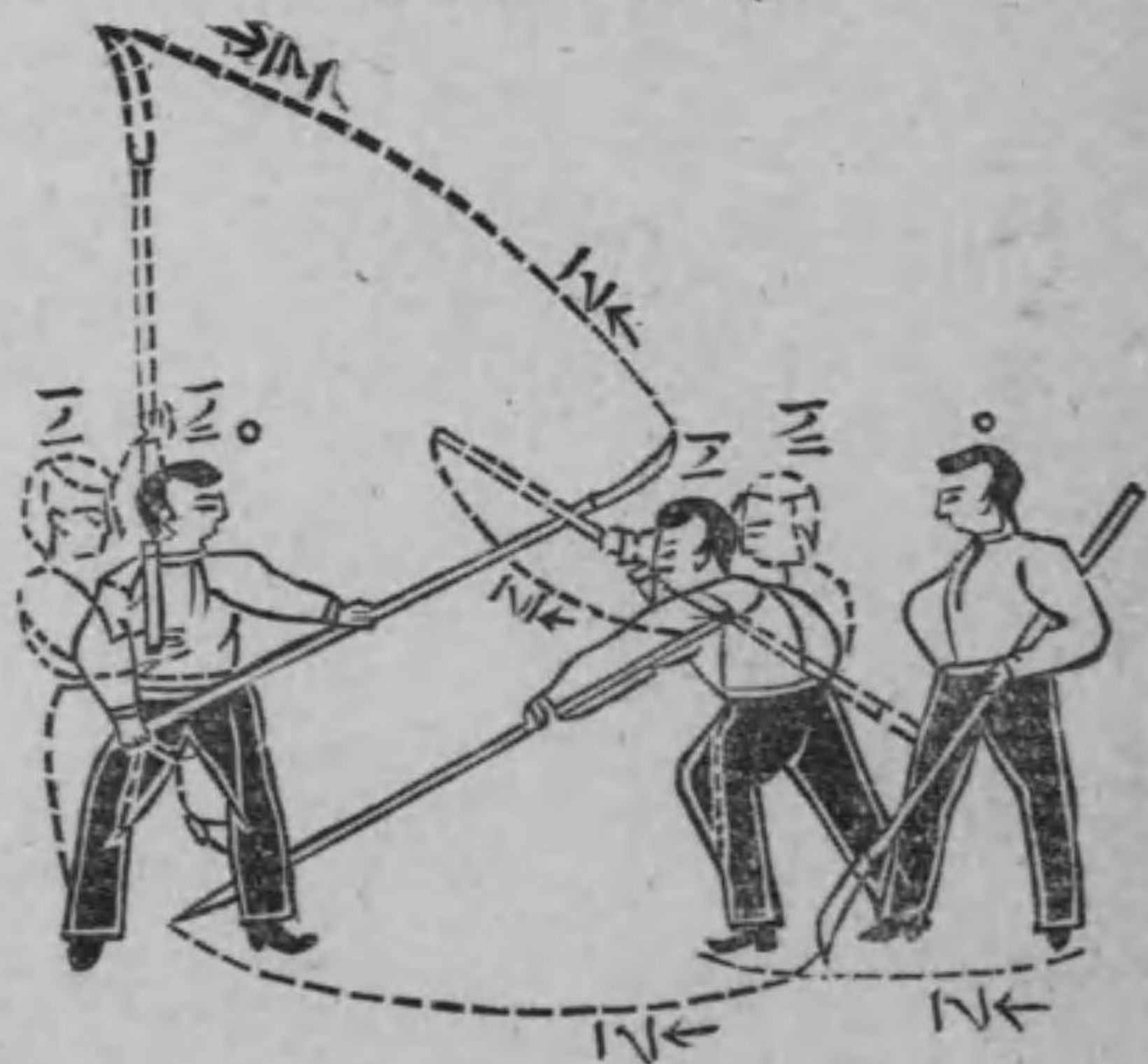
面撃を拂ふ方法

右手にて左手の八寸程前を握り、鐔を左、前、上、右方に廻はし、面を撃來る薙刀を右に拂ふ。

當、左足を退くと同時に、刀尖を上、前、下、左方に廻し構に復す。

○薙刀合

第 三 十 二 圖



矢、星眼

曳々、前足を舉ぐると同時に薙刀を上げ、直ちに面を撃つ。

當、前足を踏著くると同時に星眼に取る。

○太刀合 薙刀合に同じ。

●五本目 突、々拂 肩、背の運動

○打太刀

矢、精眼

曳々、送足にて進むと同時に、喉を突き(刃下向)、直ちに送足にて退くと

同時に、我が喉を突來る敵の薙刀を右に拂ふ。

當、面撃の氣勢を示し精眼。

○薙刀合

矢、霞上段

曳々、基本演習打落の方法を行ひ、直ちに送足喉突(刃上向)を爲す。

當、足の位置を直しつゝ霞上段に取る。

○太刀合

矢、送足上段

曳々、送足にて退きつゝ敵の薙刀を打落し、直ちに送足にて進み敵の喉を突く。

當、足の位置を直しつゝ送足上段。

●六本目 面、脚 腰の運動

○打太刀

矢、霞上段

徐々進み、二歩目に「曳々」と呼びつゝ、面を撃ち直ちに脚を撃つ。

注意 脚を撃つとき下を見るべからず。

當、徐々退き、二歩目に霞上段に取る。

○薙刀合

矢、霞下段

曳々、徐々退き、二歩目に曳々と呼びつゝ、面、脚拒。

當、徐々進み、二歩目に當と呼ぶ。

○太刀合

矢、地摺下段

曳々、徐々退き、二歩目に曳々と呼びつゝ、摺上げ面撃を拂ひ、直ちに脚を拒ぐ。

當、徐々進み、二歩目に當と呼びつゝ、地摺下段。

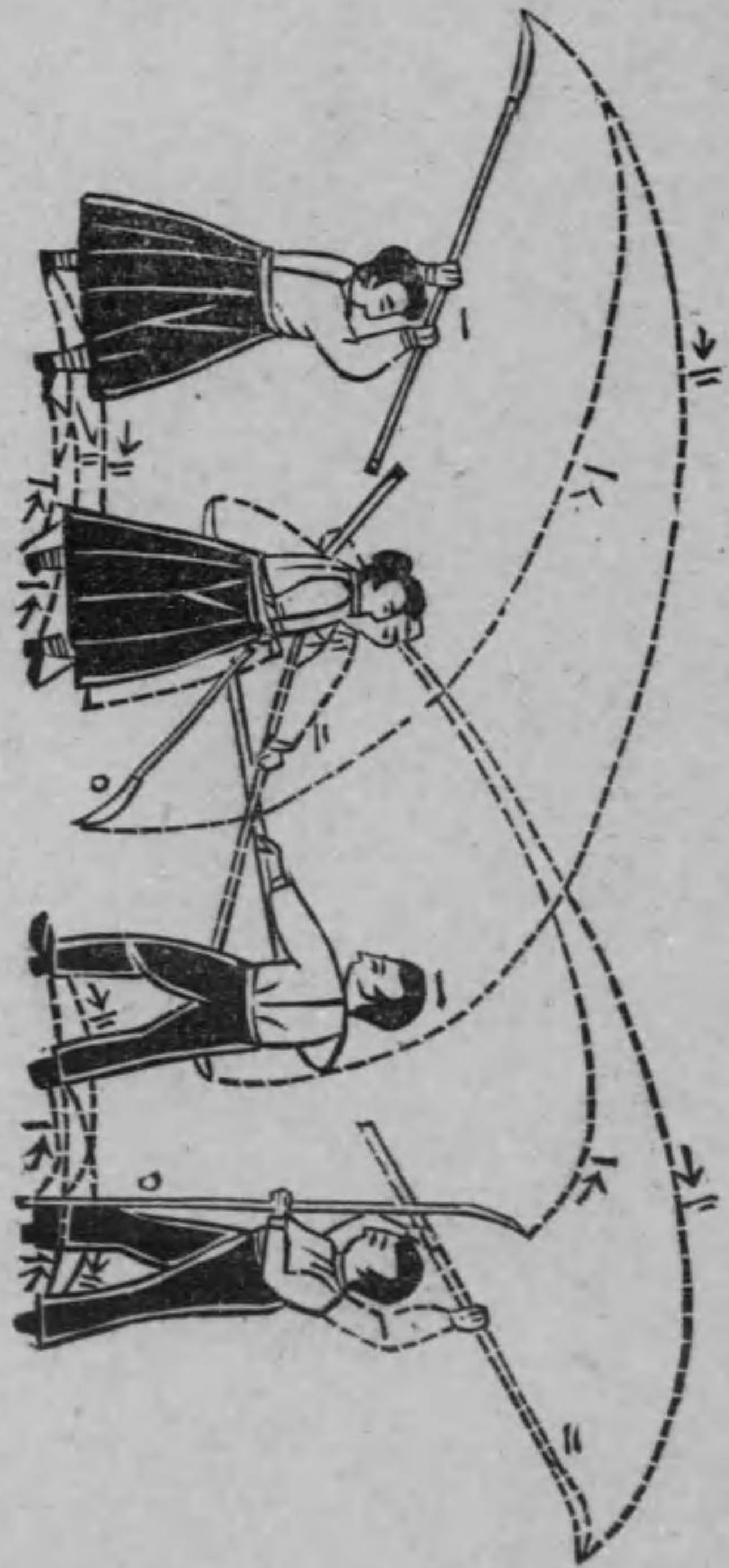
●七本目 跳斬 跳躍運動

◎打太刀

矢、左立構(第廿四圖右〇)

曳、後足を前にし跳進みつゝ、肩の袈裟斬(同圖右一)。

圖 四十二



曳、跳退きつゝ、右踏込上段の構に變ず(同圖右二)。

構換の方法 右手にて鐔を下に押放し、廻り來る薙刀を右手にて握る(左手より凡そ八寸位の部分を握る)。

當、跳違へつゝ左立構に取る。

○薙刀合

矢、左小脇(第廿四圖左○)

曳、跳退きつゝ刀尖を上げ、左踏込上段に取る(同圖左一)。

曳、後足を前にし跳進みつゝ、肩の袈裟斬(同圖左二)。

當、跳違へつゝ風車の方法にて左小脇に取る。

○太刀合

矢、下段、

曳、前足を後にし跳退きつゝ、左踏込上段。

曳、後足を前にし跳込みつゝ、肩の袈裟斬。

當、兩足の位置を直しつゝ下段、

●八本目 骨遺劍 呼吸運動

○打太刀

矢、左一文字

此の構は、揃足にて薙刀を左に倒し、左手にて下より握り、右手にて上より握り、水平にし刃を前に向く、此の如く薙刀尖を左に向くるは左構なり、右構は薙刀尖を右に向く、左右兩手の握部は腰より五六寸位離る。

第一呼吸 吸氣しつゝ徐々爪立ち、呼氣しつゝ徐々踵を下ろし續いて膝を少しく折る。

第二呼吸 吸氣しつゝ膝を少しく折りたるまゝ、左足を徐ろに一步出だす、呼氣しつゝ右足を徐々一步出だすと同時に、刀尖を後方に廻はし前後に一直線ならしむ。

第三呼吸 續いて吸氣しつゝ切先を徐々上前方に廻すと同時に、左足を進め左中段に取る、呼氣しつゝ矢、曳と呼び後足(右)より跳出て左折敷をなすと同時に、膝擲の方法にて蹲を扱出し、敵の腮を擲ふ。

第四、五、六呼吸 徐々立つ(吸氣)、一步退く(呼氣)、退二歩目(吸氣) 退三歩目(呼氣)、退四歩目(吸氣) 退揃足(呼氣)。

○薙刀合

條一呼吸 打太刀に同じ。

第二呼吸 打太刀に比し、右足より二歩退くの差あり。

第三呼吸 打太刀に比し、中段に合せたる後、大膝にて退くと同時に、上段に取るの差あり。

第四、五、六呼吸 打太刀に比し、進むの差あり、

○太刀合、薙刀合に比し、八相に構ふると、構に復する時四歩目大膝の差、

第六章 狹所演習

雨天等の爲め、狭き屋内體操場、若しくは廊下、若しくは運動場の一部分等、狭き場所にて行はんと欲する時は、手解基本演習初段中、狭き場所にて行ひ得べき運動、及び狭き場所にて行ひ得らるゝ様、變化せしめたる運動を行ふべし、之を名づけて狹所演習と云ふ、狹所演習は、生徒熟練の程度に従ひ、或は容易にして、隣生を誤まり打つが如き危険の恐れ無きものを課し、或は難易に關せず之を課する等、一に教師の方寸に在りと知るべし。

第一節 手解狹所演習(左右一回づゝ)

●一本目 八相合

方法は普通手解の方法と異なる所なし。

●二本目 脇構横面

方法 眞向面撃に變ずべし。

注意 始めに構ふる時と構に復する時は、薙刀尖を上、後下方に廻はすべし。

●三本目 中段脚

方法 異なる所なし。

●四本目 霞上段面

方法 異なる所なし。

●五本目 面、脚拒

方法 異なる所なし。

注意 構ふる時と氣を附けの姿勢に復する時、薙刀尖を左、右に廻さざる様すべし。

第二節 基本演習狹所演習左右三回づゝ

●一本目 立構面

方法 基本演習に同じ。

●二本目 上段肩

方法 基本演習に同じ。

●三本目 胴打を腮掬に變ず。

方法 基本演習胯掬の方法により、腮掬を行ふべし、腮を掬ふが故に、鐙は腮より少し高く口鼻の高さに在らしむべし。

●四本目 下段腰

方法 基本演習に同じ。

●五本目 突

方法 基本演習に同じ。

●六本目 打落

方法 基本演習に同じ。

●七本目 風車

進退風車、反身風車、共に基本演習に同じ。

注意 薙刀尖を體側に於て廻はす時、薙刀尖を體に近く前後に一直線内を廻はす様すべし。

●八本目 水車

方法を切上げに變ずべし。

切上げとは、袈裟斬の反對にて、敵の左(右)腋下より右(左)肩に切上ぐるを云ふ、切上げたる時、鐙は我が腰邊に在らしめ、刀尖は敵の側面の高さにて、刃は上左方を向かしむ。

●九本目 跳斬

方法 矢と星眼に構へ、曳と呼びつゝ跳違ふると同時に、風車の方

法により、刀尖を體の左側に於て、下、後、上、前、下、後方に廻はしつゝ、右手を放し右臍骨に當つ、此の時體は幾んど右半身たるべし。

注意 刀尖の下方に廻る時、刀尖長くして地に支ふる恐れある時は、先づ鐙を少しく後方に引き前手を刀尖の方に扱きつゝ、風車の方法を行ふべし、且つ後足を爪立つる等、適宜に行ふを可とす。

次ぎに矢と呼びつゝ跳違へ、精眼に復すること、基本演習に同じ。

●十本目 膝掬

方法 基本演習に同じ。

第三節 初段狹所演習(左右一回づゝ)

●一本目 一文字之亂

第二編 第六章 狹所演習

方法 打受共に凡べて初段に同じ。

●二本目 面、横面を、面、胯、掬に變ず。

○打太刀

矢、星眼

曳々 送足にて進み面を撃ち、直ちに後足を踏込むと同時に胯を掬ふ。

當、構に復す。

○受太刀(薙刀太刀共に)

矢、星眼

曳々 送足にて退くと同時に、面撃を拂ひ、直ちに跳退きつゝ、胯を打落す、但し刀尖を少しく左前隅に向かしむべし。

當、二步駆進み中段に復す。

●三本目 腰、々、拒

方法 打受共に凡べて初段に同じ。

●四本目 脚、面、擊、拂

方法 打受共に凡べて初段に同じ。

但し片手開の構の刀尖を少しく正面に寄せ、又面撃拂の躰も、左(右)に多く廻らざる様注意し行ふべし。

●五本目 突、々、拂

方法 打受共に凡べて初段に同じ。

●六本目 面、脚

方法 打受共に凡べて初段に同じ。

●七本目 跳、斬

打受共に凡べて初段に同じ。

● 八本目 骨遺劍

矢、初段の方法と異なる所は、薙刀は打受双方共に、右半身になりて一文字に構ふるの差あり
太刀合は、初段の方法と異なる所なし。

第七章 中段

太刀合六本
薙刀合六本

中段は、先づ太刀合せを課することとし、熟練せる後薙刀合に移るべきものとす、去りながら、薙刀合は手解に於て主として之を課し、又初段に於ても先づ薙刀合を課することとせざるが故に、中段に於ては、太刀合を主として課する事とし、生徒をして記憶に困しましめず、技術に熟せしめんことを期するを可とす、果して記憶に困しましめず、技術に熟せば、手解及び初段に於ける太刀合、中段に於ける薙刀合の如き、學習者は自ら了解するに至る可ければ、幾んど其の域に達する迄熟練せしむべし、熟練せる後は、連續法に従ひ施行せしむべし。中段も左右一回づゝとし、左構動作より始む、故に説明も亦左構動作のみに止む。

中段に於ける掛聲は、斬突部を呼び、受け拂ひ又は打落なる時は、矢と呼

ぶも可なり。

●一本目 胴斬 面撃拂、横面打、胴斬、跳退拂、三舉動
矢 下段霞

曳、送足にて進むと同時に、右横面を押斬りす。

曳、後足を踏込むと同時に、躰にて左横面を打つ。

曳々、前足を退くると同時に、胴を斬り直ちに跳退きつゝ、面撃を拂ふ。

但し教授の始めは、胴斬と面撃拂とを分解して、二舉動に行ふべし
當、其の場に在りて構に復す。

○太刀合

矢、踏込上段

曳、前足を退くると同時に横面撃を拂ふ。

曳、前足を退くると同時に横面拒。

曳々、後足を踏込むと同時に、胴拒、直ちに跳込み面撃。

但し教授の始めは、胴拒と面撃とを分解して、二舉動に行ふべし。

當、跳違へつゝ、構に復す。

○薙刀合

矢、八相

曳、前足を退くると同時に横面撃を拂ふ。

曳、前足を退くると同時に横面打を拂ふ。

曳々、後足を進むと同時に、両手にて薙刀を垂直にしつゝ、躰を下げ、
両手間の柄を廣くして、胴を拒ぎ、直ちに跳込み面撃。

但し教授の始めは、胴を拒ぐと八相に復するとを分解して、二舉動
に行ふべし。

當、跳違へつゝ、八相に復す。

●二本目 踏込乳間ふみこちちま 面撃、膝掬、隅跳後頭撃、三舉動
矢、踏込乳間

曳々、二歩駆進みつゝ、面を撃ち膝を掬ふ。

但し教授の始めは、面撃と膝掬とを分解教授す。

曳、左前隅跳を爲し敵の後頭を撃つ。

當、後足より定位に向つて三步駆進み、其の三步目の足を軸とし、四歩目に正面を向きつゝ、構に復す。駆進む時、敵に注目すべし。

○太刀合

矢、八相

曳々、前足を退けつゝ、面撃に合はせ、直ちに又前足を右後隅に退けつゝ、敵の薙刀を交叉の形にて左下方に打落す。

曳、後足を踏込み體を屈めつゝ、面より膝に掛け撃下ぐ。

當、後足を進め八相。

○薙刀合

矢、下段霞

曳々、面撃を拂ひ、直ちに跳退き前足を上げつゝ、蹲にて敵の蹲を右方に拂ふ。

曳、送足にて進みつゝ、體を屈め、面より膝に掛け撃下ろす。

當、其の場に在りて霞下段。

●三本目 脚々面々 脚斬、脚打、面斬、面打、三舉動
矢、横構

曳、左足を踏込むと同時に、敵の脚を斬る。

曳、左足を退くると同時に、蹲にて脚打を拒ぐ。

曳々、左足を踏込むと同時に敵の面を撃ち、直ちに右足を踏込み蹲に

て面を打つ。

但し教授の始めは、刀尖面撃と石突面打とを分解して、二舉動に行ひ、曳々と呼ばしむべし。

當、二步駆退き構に復す。

○太刀合

矢、精眼

曳、送足退脚拒。

曳、後足踏込、脚の交叉撃。

曳々、前足を退けつゝ、面撃を鎬又は棟にて左に拂ひ、直ちに跳退きつゝ、面撃を鎬又は棟にて右に拂ふ。

當、二步駆進み精眼に復す。

但し教授の始めは、分解して二舉動に行ふ。

○薙刀合

矢、横構

曳、右足を退くると同時に脚を拒ぐ、但し鎬又は棟にて受止む。

曳、右足を踏込むと同時に、鎬にて脚を打つ。

曳々、送足にて退くと同時に、石突にて面撃を左に拂ひ、直ちに跳退きつゝ、石突にて面打を右に拂ふ。

但し教授の始めは、分解して二舉動に行ふべし。

當、二步駆進み構に復す。

●四本目 折敷面 面撃、鎬留、脚拒、折敷面 四舉動

矢、霞下段

曳、二步駆進み面を撃つ。

曳、前足を退けつゝ、鎬留。

曳々、^二兩手にて握りたるまゝ、前足を退けつゝ、石突を地に斜め、鐙を右前隅、刀尖を左、後隅の方向に立て脚を拒ぎ、直ちに前足其の儘にて右折敷面。但し教授の始めは、分解して二舉動に行ふべし。

當、立ちつゝ構に復す。

○太刀合

矢、下段

曳、送足退面拒。

曳、後 足を進め面を撃つ。

曳々、後足を進め脚を撃ち、直ちに面撃を拂ふ。

但し教授の始めは、分解して二舉動に行ふべし。

當、送足退下段

○薙刀合

矢、下段

曳、送足退面拒。

其の方法は、刀の順受に比し、鐙を握れる手を一尺程扱くの差あるのみ。

曳、後足を踏込みつゝ風車の面撃。

曳々、後足を踏込みつゝ鐙にて脚打、直ちに鐙にて面撃拂。

但し教授の始めは、分解して二舉動に行ふべし。

當、送足にて退きつゝ、薙刀尖を上前方に廻し構に復す。

●五本目 鐙突 鐙突、脚拂、跳違、袈裟斬、外突 五舉動

矢、立構

曳、後足より二歩駈進みつゝ鐙にて胸を突く。

曳、後足を踏込むと同時に、刀尖を後下、左前、右方に廻し脚を拂ふ。

曳、跳違へつゝ風車の方法にて袈裟斬す。

曳、送足にて心窩を突く(外突)。

外突とは、刃を外即ち我が體と反對の方向に向け突出すを云ふ、内に向け突くを内突、上に向け突くを上突、下に向け突くを下突と云ふ。

當、前足より駆退き、四歩目に立構に復す。

○太刀合

矢、精眼

曳、前足より左方に跳び揃足左陰に取る。

曳、跳上がり空を拂はしむ。

曳、右足より右後隅に跳ぶ(揃足なれども、兩足斜めの位置にて、左足は左前隅の位置に在り)。

曳、後足より右に跳び左足は右足の前に在らしめ、體は左半身、刀尖を

左前隅に向け、突來る薙刀を打落す。

當、後足より左前隅に二歩駆進み精眼に復す。

○薙刀合、大體太刀合に同じ

矢、送足乳間

曳、左方に跳び揃足乳間。

曳、跳上がり空を打たしむ(太刀合に同じ)。

曳、右後隅に跳退き揃足乳間(太刀合に同じ)。

曳、後足より右方に跳びつゝ、薙刀尖を左前隅に向け打落す(太刀合に同じ)。

當、後足より左前隅に二歩駆進み、送足乳間に復す。

●六本目 追込面 面を撃ち上段霞に變ず、追込面撃、踏違面撃、踏違花

車横面、同上 六舉動

矢、小脇

曳々、踏込風車の方法にて面を撃ち、直ちに霞上段に取る。

曳、後足より大脇にて三步駆進むと同時に、風車の方法にて面を斬る。

曳、踏違風車の面撃。

曳、踏違花車の横面撃、此の時鐙は耳の高さにて、薙刀は水平。

曳、同上。

當、前足より大脇にて三步駆退きつゝ小脇に復す。

○太刀合

矢、地摺下段

曳、送足にて退きつゝ摺上げ直ちに星眼に取る。

曳、前足より四歩駆退きつゝ、左脇卷を爲し星眼に取り、敵の面撃に合

はす。

曳、送足にて進み面受。

曳、左横面受。

曳、右横面受。

曳、四歩摺足にて小脇に駆進み、舊位に復し、地摺下段。

○薙刀合

打太刀に比し、只進退を反對にするの異あるのみなれども、花車の横面撃は、鐙を少しく上げ刀尖を少しく下ぐ、左すれば双方の刀尖は能く合ふべし。

第八章 上段 奥之手 六本

奥之手は太刀合のみとす、然れども、折敷撃、圍衝の如きは、四方の敵を相手にして戦ふ者なるが故に、太刀合も無し、要するに奥之手は、薙刀術の真髓とも云ふべき精妙なる所を使ひ分くるを主とし、且頗ぶる復復せるを以て、各自演習として行ふを本體とす。

奥之手も亦、左右構動作各一回づつ行ひ、左構動作より始むべし。説明は左構動作のみに止む。

奥之手に於ても、撃は斬突部を呼び、受は矢と呼ぶも可なり。

●一本目 風水花車 十舉動 ●太刀合 十舉動

矢、霞上段

(一)曳、送足上突。

矢、中段

(一)曳、退送足面撃左拂。

(二)曳、進二回轉風車面撃。

(三)曳、同右。

(四)曳、退二回轉水車切上げ。

(五)曳、同右。

(六)曳、踏違二回轉花車横面。

(七)曳、同右。

(八)曳、三步駆進みつゝ二回轉風車面撃

(九)曳、三步駆退きつゝ二回轉水車高切上。

(一〇)當、送足にて退き構に復す。

●二本目 二手三手打 七舉動

矢、左陰。

(二)曳、踏込。小手、面。

(二)曳、退送足、面撃右拂。

(三)曳、同上、左拂。

(四)曳、送足にて上段直ちに精眼、

(五)曳、同上。

(六)曳、左横面受。

(七)曳、折敷右横面受。

(八)曳、駆退四歩星眼。

(九)曳、駆進四歩上段。

(一〇)當、送足中段。

●太刀合 七舉動

矢、中段

(二)曳、送足退、左、右陰。

- (二)曳、送足。脚押斬、刃反右頸。
 - (三)曳、送足。左横面押斬、刃反腿。
 - (四)曳、送足。刃反左腰押切、踏込鑄横面。
 - (五)曳、鑄脚擊、刀尖面擊、跳進内突。
 - (六)曳、扇體。
 - (七)當、右足より駈退き、四歩目左陰。
- 三本目 片足立 九舉動
- 矢、下段霞。
- (一)曳、面擊拂、跳退後片足立、前足前舉脚拒。
 - (二)曳、左片足立、右足前舉、諸手逆薙左横面。
 - (三)曳、右片足立、左足前舉、諸手順薙脚。
 - (四)曳、跳進左片足立、右足後舉上突。
- (二)曳、送足退左陰。
 - (三)曳、送足退上段。
 - (四)曳、送足退横面受。
 - (五)曳、脚受、面受、送足退面打拂。
 - (六)曳、跳退下段。
 - (七)當、四歩駈進中段。
- 太刀合 九舉動
- 矢、踏込上段。
- (一)曳、踏込面脚。
 - (二)曳、左横面受。
 - (三)曳、跳違、薙刀左拂。
 - (四)曳、退右後隅、薙刀上拂。

- (五)曳、跳進右片足立、左足後舉水車切上。
 - (六)曳、跳退左片足立、右足腿舉、鑄胴打。
 - (七)曳、跳退右片足立、左足腿舉面擊。
 - (八)曳、跳退左片足立、右足腿舉、諸手逆薙肩。
 - (九)當、左足進下段霞。
- 四本目 跳斬 六舉動
- 矢、片手開
- (五)曳、隅跳戻、薙刀上拂。
 - (六)曳、送足、刀尖を下け柄右拂。
 - (七)曳、送足、薙刀左拂。
 - (八)曳、送足退、精眼。
 - (九)當、左足退左踏込上段。

- (一)曳、左片手にて三歩駈進み脚拂ひ、直ちに刃を反し左足を退け脚拂。
- (二)曳、刃を下より反し、敵の右脇より切上ぐると同時に、跳違へ右折敷を爲しつゝ、續いて刀尖を右後、左方に廻はし、左手を右肩に着け、右手を右方に伸ばし薙刀を持つ。
- (三)曳、起ちつゝ跳違ふると同時に刃を反し、左片手にて敵の左肩を袈

袈斬す、此の時右手は右腰に當つ。

(四) 矢、曳々、跳違ふると同時に、左片手にて敵の右横面を撃ち直ちに鎗にて脚を打ち、又直ちに跳上がり跳下がると同時に面を撃つ。

(五) 曳々、面受、卷落、送足突。

(六) 當、三步駆退きて左片手開に復す。

● 太刀合 六舉動

矢、八相

(一) 矢、三步駆退き送足上段に取ると同時に、前足を上げ直ちに踏着け中段に取り、復た直ちに其の足を上げ上段に取り踏着け中段。

(二) 矢、跳退送足上段。

(三) 矢、其の儘の姿勢。

(四) 矢、跳退き右横面受、直ちに前足を上ぐ。

(五) 曳、送足にて面を撃ち、刀を券落され直ちに右横跳(前足の右)。
(六) 當、左足より左前方に四歩駆進み、定位にて八相に復す。

● 五本目 折敷撃 八舉動 太刀合無し

矢 小脇

(一) 曳、跳違右折敷二回轉風車面。

(二) 曳、跳違左向左折敷二回轉水車脚。

(三) 曳、跳違左向(正面より見て後方)右折敷風車面。

(四) 曳、跳違右轉回左折敷面。

(五) 曳、右隅跳右折敷兩手握換前胴撃。

(六) 曳、起ちつゝ、隅跳戻り面。(右中段の姿)

(七) 曳、送足折敷脚の押切。

(八) 當、送足退左小脇。

第二編(第八章) 上段 奥之手

●六本目 圍衝 六舉動 太刀合無し

左右前後の方角は始めの正面向より云ふ。

矢、左脇横

(一)曳、刃を反(上より右に向け)しつゝ、兩手を舉げ、左片手にて頭上に於て、刀尖を右、前、左、後下方に廻す。

(二)曳、刃を反(上より前向き)しつゝ、刀尖を左、前、右、後、左(此の時右手を添ふ)前(此の時右手を鐙に扱き右足を退く)方に廻はす、續いて刀尖を右、後方に廻はすと同時に、右轉回踏込(左足)を爲す、(後向き)尙續いて刀尖を左、前方に廻はすと同時に、右轉回踏込(右足)を爲すと同時に脚擊。

(三)曳、左向き左折敷を爲すと同時に、刀を反しつゝ、頭上に於て、刀尖を一回と四分の一程左巻をなし、兩手を握換へ脚斬。

(四)曳、起ちつゝ、右轉回跳違へ後向右方向右折敷をなすと同時に、刃を反し、刀尖を頭上に於て、二回轉花車(右巻)をなしつゝ、兩手を握換へ脚斬。

(五)曳、起ちつゝ、右足を後方に移し正面を向くと同時に、刃を反し我が右(後方)を拂ひ、直ちに刃を反し我が左、後方(前、左方)を拂ひ、又直ちに刃を反し正面まで拂ひ、又直ちに後足(右)より四歩駆進み、右轉回を爲しつゝ、左踏込上段に取る。

(六)當、大踏踏込左轉回を爲すと同時に、左脇構に復す。

第九章 各學年配當

以上第三章より第八章に至る迄、述來りたる所の各技術を學徒に課する場合は之を如何にすべきやは第一編第八章劍術の各學年配當の條に於て述べたる所と大同小異なれば、讀者は既に知了せられし處の劍術各演技各學年配當表に對照し、左表を一覽せらるれば、蓋し思ひ半ばに過ぐる者あらん、仍つて重複を厭ひ茲に贅せず。只薙刀術に於ける奥之手は、尋常小學に課せざるを異なりとするのみ、然れども、尋常小學に於ても、熟練の程度に従りては、必ずしも課す可からずと云ふに非ず、假令六本全部に非ずとも、一、二本たりとも課するを得ば、寧ろ喜ばしき次第なり

●體育流薙刀術各學年配當表

但し下欄學年の高一、高二は、高等小學と高等女學校の、學年の意味に解すべし。

學年手	解(五本)	學年基本演習(十本)	學年初段(六本)	薙刀合	學年中段(六本)	薙刀合	學年上段(奧之手六本)
三八相合	四立構面	四一文字之亂	五脚	高一風水花車			
三脇構横面	四上段肩	四腰、横面	五踏込乳間	高二片足立			
三中段脚	四下段腰	五腰、腰拒	五脚々面々	高二片足立			
三段上段面	五突	六脚、面擊拂	六折敷面	高二折敷			
三面脚拒	五打落	五突、突拂	六折敷面	高二折敷			
	六風	六脚、面擊拂	六折敷面	高二折敷			
	六水	六脚、面擊拂	六折敷面	高二折敷			
	六跳	六脚、面擊拂	六折敷面	高二折敷			
	六勝	六脚、面擊拂	六折敷面	高二折敷			
	五勝	五勝	五勝	五勝			

更に之を各學年別にすれば左記の如し

●高小 女學一三年 學生年	●手入 相解合 脇構面 中上段 面脚拒
●高小 女學一四年 學生年	●基本演習 立構面 上段 下段 腰擊
●高小 女學二五年 學生年	●基本演習 突打 肩面 胸落
●高小 女學二六年 學生年	●基本演習 風車(進退反身) 水跳 斬車
●高等 女學校各學 年	●上段 風水花 二手三手 片足 跳敷 折敷 圓折

體育流劍術薙刀術 一名劍術體操薙刀體操終

體育流劍術 一名劍術形體操 跋

予嘗て本邦固有武術を體操法に應用せは、身體の運動及ひ精神の修養上、偉大の效力あるべきを豫想せり。果せる哉、知友小澤君、十數年前既に之れを公表し、爾來實驗に徴し、幾多の改良を加へ、茲に劍術形體操一名體育流劍術と云ふ一書を刊行せんとし、予か門を叩き曰く、乞ふ武術上より批正の勞を吝む勿れと、予篤と君か實地試演を視、又其の説明を聽き、一二管見を披瀝せる外、其の方法博く諸流の粹を抜き精

を萃め、其の組立の妥當にして整然、殊に斬返九方法の考案創始、皆是れ君の卓識先見の明に由る所、以て君か如何に劍術體育兩者に對する、用意周到造詣深甚且熱心なるかに感服せり。

其の左構動作の如き、體育上不可缺のものたるは勿論、之れを武道の一進歩と見るを得へし。夫の幕臣伊庭氏か、函嶺に於て敵の爲めに右腕を斬落され、左手にて衆敵を斬抜けたるか如き、又岡山縣の人坂田團次氏か、臺灣の土匪と激戰中、銃丸氏の右臂關節を貫く、氏屈せず左手にて奮闘を續け、應援者と與に遂

に敵を擊退し、現に左隻手を以て、甲陽劍法館劍道柔道指南として健在せるか如き、孰れも左臂の働きの賜ものに非ずして何そや、之れを進化せる武術と云ふも敢て溢言に非ざるへし。加之吾人々類か、左右兩臂共に同しく動作に慣熟すれば、生活上大いに便利にして、人生の幸福を増進すへきこと幾何なるやを知るへからず。

之れを要するに、本書記する所の體育流劍術は、體育劍道各相侵すこと無くして、共に其の本領を發揮す、是れ我邦現代未來に於ける、體育上國防上の要求に

體育流劍術版

應したる、重大の使命を齎らせる者に非ざらん乎。

辛亥夏

東京高等師範學校劍道師範

高野佐三郎

大正七年八月廿五日印刷
大正七年九月九日發行

定價金壹圓



東京府豊多摩郡澁谷町大字下澁谷
百十七番地

著作者 小澤卯之助

東京市牛込區市谷河田町十三番地
發行者 本圖晴之助

東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷者 白土幸力

東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷所 三光堂

發行所

東京市牛込區市谷
河田町十三番地

大日本學校衛生協會
電話三六一、振替東京二一四七

213270

終

複製